?SPADE?

紫吹　零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
？ＳＰＡＤＥ？

【Ｎコード】
Ｎ２６９８Ｔ

【作者名】
紫吹　零

【あらすじ】
「必ず帰ってきます」
そう言った婚約者は、後に紫紅戦争と呼ばれる戦で、死んだ――――。敗戦国の皇女・エンディラは、二人の弟と一人の妹とともに、戦勝国で隣国・ヴァルドシュタール王国に身柄が引き渡された。全てをその身に背負いこむことを決めて。
それがようやく落ち着いてきた頃、さらなる厄介がエンディラを襲うことになった――――

序章（前書き）

恋愛、とありますが、多分微妙になります。
グダグダになりますが、それでもよければどうぞ。

序章

自室の扉が叩かれた時、エンディラは悟った。
扉が開いて、入って来た人を見た時、それはもう確信になった。
「――――――――行くのか？」
震える声を隠して、彼にそう尋ねる。彼は柔らかく微笑んだ。
「はい」
「そうか」
いつもと同じ冷たい声が出る。
ああ――――――
どうして、いつもこんな心にもない冷たい声が出るのだろうか――――――――？
「……あ」
「必ず、必ず帰ってきますよ――――――――姫様」
エンディラの手の甲をとり、その手に唇を落とす。騎士が貴婦人にするような真似。エンディラは冷たくそれを見下ろしながらも、内心では大人扱いされたことを嬉しく思っていた。
「――――――――約束、だ」
エンディラはそう言って、背後の机に置いていた淡い紫紺色の布を差し出した。差し出された綺麗に畳まれた布を見て、彼はきょとんとエンディラを見る。
「これは――――――？」
お守りだ。
私が作った――――――
そう言えばいいのに、その言葉は素直に口に出てはくれない。間違えて唇にのりを塗ってしまったみたいで、唇が動かない。
だからエンディラは、そっぽを向いた。結わずにたらしたままの、癖のないまっぐな黒髪が揺れる。
しかし彼はそんなエンディラの想いが分かったのか、また柔らか

く微笑んでくれた。
「いただきます」
そう言ってそっと布を受け取り、彼は広げた。紫紺の布地に刺繍された、お世辞にも上手とは言えない黒い動物が左下の隅にいた。ただ、一緒に添えられている金色の剣は、とても上手かった。
「――――――――姫様が、刺繍されたのですか？」
「――――――――下手で、すまない」
次なる皇帝になるべく育てられてきたエンディラだが、勉強もたしなみ程度の剣技も全てそつなく出来ることが可能だった。しかしダンスや刺繍などの、普通の姫達が得意とするものは全く駄目だった。ダンスだけは持ち前の運動神経でなんとかなっているが、刺繍や詩を呼んだりするのは大の苦手だった。
彼はそれを知っていた。だからこそ、エンディラがその苦手な刺繍をして、しかも自分がそれをもらうとは――――――――――
「うちの家紋ですね」
金の剣とジャッカル。それが彼の家の家紋だった。そして地となっている紫紺は、エンディラの、ビルマーダ帝国の国旗の色だ。そして、エンディラの目の色である。
「お守りとして、いただきます」
笑顔で言って、彼は布をポケットにいれた。
「行ってきますね、姫様」
そう言って彼はエンディラの部屋を出た。
いってらっしゃい。
最後まで、そう言うことは出来なかった――――――――

後日――――――――

「皇太子殿下！！」
エンディラの部屋使者が慌てて飛び込んできた。
「どうした？」
飛び込んできた使者を一瞥したエンディラの目は、まるで氷のようだった。
その視線にひるみながらも、使者はある物を差し出した。
「これを――――――」
差し出された物に、エンディラの紫色の瞳が見開かれた。
それは、エンディラが彼に贈った、あの布だった――――――
血にまみれた、ジャッカルと金の剣――――――

嘘つき――――――
必ず帰って来ると、言ったじゃないか――――――

第1章

南方の諸国周辺で最大の国土と歴史を持つ帝国――――――ビルマーダ帝国。
あるもの全てに歴史が付いて回るこの帝国。しかしそのせいか、貴族も国民も無駄と言っていいほど矜持が高いのだ。
だからか、国が出来て五年という隣国・ヴァルドシュタール王国のことを、帝国人達は蛮族とさげずんでいた。
そして帝国はその蛮族と呼ぶ隣国と、三年前から戦争を始めていた。
帝国人の誇りともいうその矜持を、馬鹿馬鹿しいと思う者がいた。
もちろん純帝国人で、しかもこの帝国で二番目ほどにいる身分の高い者だった。その名は、エンディラ・ソルラフィア・ビルマーダ。ビルマーダ帝国の皇太子である。
エンディラはなんとなくの気分で、自室の窓を開けた。分厚い雲間から少しだけ日光が差した、あんまりいい天気ではない日だった。それでも光というのは明るく、エンディラは目を細めた。
「よお、エンディ」
よく言えば明るい、悪く言えば呑気な声がエンディラを呼んだ。そんな声の主を一人しか知らないエンディラは、振り向かずに返答した。
「……なんだ、アスベル？」
聞けば誰もが身体に恐怖が駆けるぐらいの、冷たい声だった。それに少しこっちを見たエンディラの紫色の目は、見る者を萎縮させるほど鋭かった。
しかしアスベルと呼ばれた呑気な声の主は、からからと笑うとエンディラの隣に立った。
「あいかわらず怖いなあ。そんなんだから侍女が怖がって泣いちゃうんだぜ」

「……ステラがいるから問題ない」
「まあ、そうだけど……」
ステラはエンディラの姉のような存在の侍女だ。誰よりも信頼していると言っても過言ではない。エンディラにとって弟達の次ぐらい――――――否、同じぐらい大事な存在だ。
「ばれないといいな～。ステラが蛮族の親を持つって」
「ばれても問題は無い」
そんなこと言ってステラを追い出そうとしたら、皇太子としての権限を最大に使ってそいつを死んだ方がましというぐらいの目にあわせてやる――――――
小さな声だが、隣に居たアスベルにはハッキリ聞こえた。今度ばかりはアスベルの身体に恐怖が駆けた。特に眼光なんかは、心臓の弱い者なら死んでしまうぐらい強かった。
「目、怖いぞ」
もう一本しかない腕をひらひらと振って、アスベルは言った。
彼は二年前、戦場で右腕を失っていた。
「そんな目でみたら、セシルなんか泣くぞ。怖がりだからなあ……。シェスラは……泣かねえか」
アスベルが双子の弟と妹の名を出すと、エンディラの目からさっきの光が消えた。いつものように聡明な光が宿る。
その美しい容姿から『帝国の華』と謳われる双子の兄妹・セシルとシェスラ。光り輝く金髪に、海のように深い蒼い瞳の兄妹は、エンディラともアスベルとも似たところは無い。アスベルだけは、その蒼い目だけが似ているが、しいて言えばそれだけだった。
美しい双子。そしてとても、矜持が高かった。
ちょうどその時だった。
綺麗な金髪の少女が、ドアからひょっこりと顔をのぞかせた。形の整った美しい顔立ちの少女は、まだ幼さの残る可愛らしい顔つきをしている。エンディラも美しいと言えるが、彼女は研ぎ澄ました刃という部類に入る。しかしこの少女は可憐な百合と言える。

「エンディお姉さま、ベルお兄さま」
鈴のような声で、少女は二人の名を呼んだ。エンディラとアスベルはそろって振り向くと、アスベルは笑みを浮かべた。
「シェスラ」
「セシルはいませんか？」
「見てねえぞ。なあ、エンディ？」
「……ああ。それよりも、シェスラ」
無表情のまま、しかし紫の瞳は少し柔らかい色を宿して、エンディラはシェスラを呼んだ。シェスラは可愛らしく首をかしげた。
「なんでしょうか、エンディお姉さま」
「ここにいろ。セシルも、そのうち来るだろう」
ちょうどそのタイミングだった。泣きそうな顔をした容姿の整った顔立ちの少年が部屋に飛び込んできた。
「姉上ぇ、兄上ぇ、シェスラはいませんかぁ？」
そう言って飛び込んできた少年に、アスベルが呆れたように言う。
「情けないぞ！　セシル」
「そうよセシル」
「シェスラ……。ベル兄上ぇ……。エンディ姉上ぇ」
アスベルとシェスラに言われたセシルは、エンディラに助けを求めるように見る。蒼い瞳が潤み、今にも泣きそうだった。
しかしエンディラは何も言わず、優しい色を含ませた目でセシルを見た。それでも充分きつく見えるので、セシルは萎縮した。
「もうすぐ、来るはずだ」
何が？　と聞くまでもなかった。アスベルとシェスラ、セシルがキョトンとした時、一人の使者が飛び込んできた。
「皇太子殿下っ！　報告いたします」
嫌な予感しか、しなかった――――――

第2章

「何だ？」
エンディラがそう聞くと、使者はオドオドしながら、しかしハッキリと告げた。
「皇帝陛下が――――――戦死いたしました」
シェスラとセシルの息を呑む音が、エンディラの耳にはっきりと届いた。アスベルでさえも、動揺を隠し切れていないようだ。蒼い目が揺れている。
しかしエンディラは自分でも怖いぐらい冷静だった。
「……そうか」
エンディラはそう言うと、ふうとため息をついた。そして使者を部屋から出すと、弟達と妹を振り返った。
「……あ、姉上。負けたの？」
セシルの不安でいっぱいの声に、エンディラの方が不安になった。
「馬鹿。そんなの聞かなくても分かることでしょ」
シェスラが大きな蒼い瞳にいっぱいの涙をためて言った。そしてエンディラを見て、尋ねる。
「エンディお姉さま。わたくし達、一体どうなりますの……？」
「お前らはどうにもならない」
普段より優しい声音になるよう努力して（出来てない）、エンディラはシェスラに言った。キョトンとしたのはシェスラろセシルだけで、アスベルは唇を噛みしめた。シェスラはアスベルのその様子を見て、胸騒ぎを覚えた。そしてもう一度エンディラを振り返り、尋ねた。
「どういう、意味ですの……？」
「この国の貴族の掟という物について、お前達はどれくらい知って

いる？」
「掟……？」
そろって首をかしげた双子を見かねて、エンディラがアスベルに目配せをした。説明を頼む、と言うところだ。理解したアスベルは、不安げに瞳を揺らしながらも説明を始めた。
「うちの帝国はな、男女問わず第一子が全てを相続するって知ってるよな？」
「「それはなんですか？」」
今度は仲良くはもった。見事だが、あまりの無知さにアスベルは頭を抱えそうになった。エンディラでさえ、珍しい事に少し眉間にしわが寄っている。呆れているか、困っている。
「……お前らは、誰かにそう習わなかったのか？」
今度はエンディラが双子に尋ねた。そして双子は、エンディラの予想通りの答えを返してくれた。
「「はい」」
「……マジかよ」
「だって、わたくしは美しければそれでよいと皆から言われていました。事実、果物より重い物など持ったことありませんわ」
「僕も」
エンディお姉さまもそうでしょう？　と小首をかしげて尋ねたシェスラに、アスベルは本当ん頭を抱えた。
「……簡単に言おう。私には幼い頃からこの帝国を継ぐために様々なことを叩きこまれた。だからな、ビルマーダ帝国の再興を試みるためには、絶対に私が必要なのだ。それはこの国の誰もが分かっている。アスベルでも、シェスラでも、セシルでも駄目なんだ」
「わたくしでも、セシルでも、ベルお兄さまでも駄目――――――」
「そう。エンディしか知らない秘密がごまんとあるからな。ま、そのおかげで俺ら三人は命だけは確実に助かるな」
アスベルがそう言った瞬間、シェスラとセシルの顔に急激に理解の色が広がった。

「じゃあ……」
「姉上は……」
そこから先を紡ぐ者はいなかった。言わないでも、誰もが分かっていたことだからだ。
「エンディお姉さま……」
「姉上……」
双子が同時に姉を振り向いた時だった。またしても扉がノックされた。エンディラが返事する前に、すぐに扉が開いて、白い箱を持った男が飛び込んできた。
「失礼いたしますっ！　……殿下がた、お揃いで……」
「父上の首でも届いたか」
箱を見て、エンディラが冷たく呟いた。男は無言で、箱をエンディラに差し出す。受け取ったエンディラは、シェスラとセシルの方を見た。
「お前らは見なくてもいいぞ」
「いいえっ」
「ぼ、僕も見ます」
「そうか」
エンディラは箱を開けた。それを見た瞬間、シェスラとセシルが同時に手を口に持っていった。シェスラはか細い悲鳴を上げる。
「お父さま……！」
「ち、父上……」
「……えぐい事すんなぁ」
箱の中身は間違いなく、四人の父である皇帝だった。
エンディラは無言で、首を見つめていた。
「皇太子殿下」
「何だ」
箱を持ってきた男が、エンディラに一枚の封書を差し出した。エンディラはすぐに理解し、封書を受取ってすぐにそれを読んだ。
読み終わり、エンディラは息をついた。

「そうか」

封書には一言、短く書かれていた。

――――――ヴァルドシュタール、王城にて貴殿らを待つ。

第3章

エンディラとアスベル、そしてセシルとシェスラは場所に乗って帝都を出た。これから、ヴァルドシュタールへ行く――――

がたがたと揺れる馬車の中、皆無言だった。唯一同乗することが許されたエンディラの侍女のステラは、困ったようにおろおろと皇室を見渡していた。彼女以外の者は皆、帝都から出ることを許されなかった。どうしてステラだけがヴァルドシュタールにいけるのかはエンディラにも分からなかった。親がヴァルドシュタールの者だから、それだけの理由ではないような気がしていた。

すでにビルマーダは帝都も城もヴァルドシュタールに占拠されている。この馬車も、そのヴァルドシュタール側が送って来た馬車だ。ヴァルドシュタールの赤地に銀の剣をくわえた獅子が染め抜かれている紋章がある。ビルマーダの紫紺に鳳凰の染め抜かれた紋章ではなかった。

この二つの紋章の国の戦争を、後に紫紅戦争と呼ばれることになる――――――

「ステラ」

「はい、なんでしょう？」

エンディラが急にステラを呼んだ。沈黙に苦しんでいたステラはぱっと顔を輝かせてエンディラを見る。

「ヴァルドシュタールまではどのくらいかかる？」

「隣国とはいえ、あまり近いとは言えませんからねえ。普通の馬ならだいたい二日ってところです。まあ、休憩なしで飛ばして」

「普通の馬？」

アスベルがステラの言い方にひっかかった。ステラはニッコリと笑うと、説明する。

「そうです。帝国の馬なら二日……いえ、三日はかかるかもしれません。ですがヴァルドシュタールの馬なら半日もあればつくでしょ

う」
「半日っ！？」
セシルが驚いてポカンと口を開けた。ステラはうなずくと、説明を再開する。
「はい。ヴァルドシュタールの軍馬は体力、力、速さにおいてどこの馬よりも勝ります。そして見た目もとっても綺麗なんです。青毛の馬もいたり、金色だっています」
「へえ」
「そうなんですの」
双子が興味シンシンで言った。エンディラは紫の瞳を前に向ける。
「この場所を引いているのがそれか」
「ええ。その通りです、エンディラ様。しかも四頭も。半日で付くと思いますわ」
「そうか」
そしてまた沈黙が下りる。しかし今度は双子は馬に興味シンシンだし、アスベルもクールを装ってはいるが実は蒼い瞳はちらちらと馬に注目していた。本当に冷静なのはエンディラだけだった。
半日――――
あと半日もすれば、全てが決まるのだ――――

ヴァルドシュタール　王城・ルファスタにて
王太子のレトナヴァルは、自室で窓の外を眺めていた。彼の部屋は城の高い所に位置しているので、よく王都が見渡せる。そして今、彼が見ているのは大通りを通る国の紋章付きの馬車だ。誰が乗っているかなど、幼子でも分かるだろう。
「来ましたね」
レトナヴァルにそう言うのは、彼の副官であるルドウィックだ。有能な彼は、レトナヴァルが何を考えているかなどお見通しだろう。

そういえば、とルドウィックは言った。
「『剣』から連絡がありましたよ。例の件で」
そうか、とレトナヴァルが窓から目を離さずに呟いた。『剣』というのは隠語だ。まんまの意味ではない。
「それとメアリが……」
「分かってる」
大丈夫だとレトナヴァルは笑顔で言った。すると部屋の扉がノックされ、高い声が聞こえる。
「レト様、メアリです」
「入ってくれ」
入って来た女性――――メアリは、レトナヴァルとルドウィックを見つけると、にっこりと微笑んだ。嫌な予感がするなあ、とレトナヴァルが思った瞬間、ルドウィックが「私はこれで」と一礼し立ち去ろうとする。しかしすぐにメアリに手を掴まれ、それは阻止された。
「ふふふ」
艶やかな笑みは、不気味にしか感じなかった。

第4章

エンディラは馬車につけられた窓から、ヴァルドシュタールの王都・サルダールを見つめる。ビルマーダの帝都・シィールースとは違い、サルダールは活気に満ちていた。矜持が（無駄に）高い帝国人とは違い、ここにはそういう人が少ないのかもしれない。

ただ、その活気づいている人々は、この馬車をちらちらとうかがっている。エンディラはその意図に気付き、さっと窓から目を離した。

「……じろじろ見るなんて、野蛮ですわ。わたくし達を誰だと思っているのです。さすがは蛮族――――」

「シェスラ」

美しく整った顔をしかめながらシェスラは言う。それをアスベルがたしなめるように彼女の名を呼んだ。

「……これだから帝国人は――――――」

ステラが唇もあまり動かさず呟いた。幸い、聞こえたのはエンディラだけだった。エンディラも自国の民の矜持の高さにうんざりしているからだ。

「シェスラは馬鹿だなあ」

珍しくセシルが言った。そんな双子の兄をきっとシェスラは睨んだ。セシルはおどおどしながら、それでも述べる。

「……だって、僕等はこの紋章に助けられているんだよ。もしこの馬車じゃなきゃ、僕らきっと石でも投げられてるよ」

ですよね、姉上？

最後の方は自信なさそうに語尾が小さくなった。最終的にエンディラの方を助けを求めるように見る。エンディラは無表情のままうなずいた。

「――――――もうすぐ、付くな」

けして遠くない位置にヴァルドシュタールの主城・コルダールが、

エンディラの紫の瞳にうつった。
もうすぐ、下されるのだ――――
「……Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ……だな」
そう呟いたエンディラを、アスベルとシェスラとセシルは複雑な顔で見つめる。エンディラはきっと死ぬだろうと思った。だが、不思議と怖くわなかった。
（私は、おかしいからな）
内心で自嘲気に呟いて、エンディラの意識はあの日に戻る。
私の心は、あの日、彼とともに死んだ――――――
最後にあった時、私は彼に「行ってらっしゃい」と言えなかった。だが、今度は彼にきちんと言えるのだろうか？
「ただいま」――――――って。

数時間後――――――
コルダール城の謁見の間。レトナヴァルは王である父のかなり近くに立っていた。他にもまわりには重臣が並んでいる。ふくよかな者もいれば、がりがりの者もいる。そんな十人十色なメンツだが、共通していることが一つ、あった。皆、視線は玉座の向かいの扉にあるのだ。開くのを、待っている。正しくは、開いた時に入って来るはずの者達を――――――
そして、開いた。
皆の視線が注目するなか、最初に入って来たのは黒いシンプルなドレスに身を包んだ女性だ。艶やかな黒髪を半分結い、半分そのまま背に流している。髪もドレスも真っ黒なので、白い肌がより目立つ。そして唯一違う色の紫水晶のような鮮やかな瞳。抜き身の刃を思わせる少しきつめの、しかし美しい容貌の女。
ビルマーダ帝国皇太子、エンディラ・ソルラフィア・ビルマーダ。
齢十九の、しかしやり手と称される皇女だ。

その後ろから出てきたのは、同じく黒い服で黒髪の青年。いたずらっ子じみた光を映す蒼い瞳の、まんまいたずらっ子のような青年だ。ただ、服の片腕は通っていなかった。第一皇子アスベル。

そしてさらにその後ろから出てきた二人の少年と少女。金色の光輝く髪に蒼い瞳の美しい双子だ。蒼のペアルックを着ている。二人を見て、レトナヴァルは思わずうなった。たしかに、『帝国の華』と呼ばれるのにふさわしい容貌だ。

（でも馬鹿そお）

心中でこっそりそう評価しながら、レトナヴァルは玉座の父を見る。あいかわらず何考えてんだかわかんないのほほん面だが、こう見えてかなりの曲者だ。

「お初にお目にかかります。エンディラ・ソルラフィア・ビルマーダです」

玉座に向かって、皇太子女（レトナヴァル談）は即座に跪いてそう述べた。レトナヴァルを始め、多くの重臣が驚いた。帝国人が自分達を『蛮族』と呼んでいるのは知っている。その帝国の、今現在最も地位の高い女が、なんとあっさりと蛮族の王に頭を下げたのだ。

「エンディラ殿。どうぞお立ち下され」

さすがののほほん親父（レトナヴァル談）も驚いたようだった。柄にもなく声が震えている。……なんと面白がっているらしい。

立ちあがった皇太子女は、まっすぐに王を見つめる。紫水晶の瞳は、まるで凪いだ水面のようだった。

レトナヴァルは急にエンディラが怖くなった。そして、思い出した。戦場で、情けなく敵に命乞いしたあの男――――

似ているところなどないのに、なぜだか思い出した。

（そうだ……）

ふと、レトナヴァルは思い出した。

あの男は、この女と同じ目の色の布を大事そうに抱えてたんだっけな――――

第5章

「では、本題に入ろう。エンディラ殿」
「はい」
変わらない冷え切った紫の瞳を、王に向ける。のほほんとした顔が、しかし見極めるようにエンディラを見る。
「貴女には、我が王室の一員になっていただきたい」
……ん？
ビルマーダの皇室四人は、そろってそう聞き返した。いつも無表情で感情の少ない――――というかほとんどないエンディラでさえ驚愕を隠せなかった。
「……私が、なんと？」
「我がヴァルドシュタールの王室の一員になっていただきたい。そう申したのですよ」
突然すぎる話にエンディラは頭をフル回転した。絶対に自分は殺されると思っていたのだ。それが、王室の一員？　つまり――――――
「エンディ……姉上は王太子殿下に嫁ぐ、ということですか？」
アスベルがうきうきしながら聞いている。楽しんでいるのだ。彼もエンディラが殺されると思っていたのだろう。だからこそ、その心配はなくなったので純粋に楽しんでいるのだ。
（他人事だと思っているな……）
内心でそう思い、エンディラは脱力する。
「その通りだ、アスベル殿」
国王も楽しそうだ。
「では、とりあえずアスベル殿、セシル殿、シェスラ殿は下がってもらえるかな？」

うきうきしているアスベルと、よく分かっていない顔のセシル、それから少しぼおっとした顔のシェスラが退室した。残されたエンディラは、これから何が起こるかうすうす察していたので、まっすぐ立って王を見つめた。
「さて、本当の本題に入ろうか」
「帝国の土地をどうするか、ですか。それから貴族の処置と、民の処置」
「さすがエンディラ殿。聡いですなあ」
「この程度、さっせなくては皇太子は務まりませんでしたので」
パチパチと手を叩いて賛美する国王に、エンディラはかわらず淡々と答える。そんなエンディラを、王は目を細めて見やった。
「エンディラ殿は本当に、ティルレシア殿に似ておられますなあ」
「お婆様ですか？」
「ええ。殺戮の女傑と呼ばれたティルレシア殿は、我らヴァルドシュタールに好意にしていただきましたから」
「祖母は実力のある者が好きでしたので」
エンディラの祖母のティルレシアは、平民だろうがなんだろうが実力のある者を次々に採用する方針をとっていた。そのおかげか、祖母の代はかなり有能な臣下がそろっていた。父である先代皇帝もその方針をとっていたが、祖母ほど上手くはいかなかった。そのせいで、紫紅戦争が起こった。
紫紅戦争は、貴族贔屓でない皇帝に不満を抱えた大貴族が、暇つぶしにヴァルドシュタールの商人や貴族を殺したことが発端で勃発した。
その貴族を渡せ！　と主張するヴァルドシュタールの怒りを無視し、その貴族を皇帝がかばったため始まった。しかしその貴族も、戦争で戦死した。
エンディラは貴族が嫌いだ。皇帝も。その問題さえ起きなければ、彼は死ななかったのだ――――
エンディラは淡々と王と話し合った。これからの方針や、貴族の

処置等々。
「――――このぐらいでいいだろう。エンディラ殿は何かほかに言いたいことはあるか？」
「はい」
エンディラは述べた。真剣なまなざしで王を見つめる。王もしっかりと見やり、そしてエンディラの条件を飲んだ。
「それだけでいいのですかな？」
「はい」
しっかりとうなずき、エンディラは低頭した。
その様子を、レトナヴァルは厳しい目つきで眺めていた。

第6章

ビルマーダ帝国皇室の四人がヴァルドシュタール王国にやって来て、一週間が過ぎた。

庭園で騎馬隊に混じって訓練をしていたレトナヴァルは、ふと感じた視線に顔を上げた。するとその先には、いたずらっ子のような目をした黒い服の少年が立っていた。黒髪でありよく日焼けした少年のなので、全身黒ずくめに見えたが、しかし海のような真っ青な瞳が遠目でも充分目立った。そして、右の袖だけが妙に風になびいていた。

ビルマーダの第一皇子、アスベルだ。

紫紅戦争で右腕を失ったと聞いた。きっとヴァルドシュタールを恨んでいるのだろう――――――

レトナヴァル布で汗をぬぐいながら嗤う。

そんなレトナヴァルの視線に気付いたのであろう。アスベルが左腕を上げた。笑顔で。少し戸惑いながら、レトナヴァルも習って手を上げる。するとアスベルはすたすたと近付いてきた。

「こんにちは、レトナヴァル殿。いい天気ですね」

にこやかに挨拶してきたアスベルの顔に、演技は無いと思えた。だからレトナヴァルも挨拶を返す。

「こんにちは、アスベル殿」

「訓練ですか？」

「ええ。いい天気ですから」

「これがヴァルドシュタールの馬ですかあ。立派ですね」

「でしょう！」

羨望の眼差しでレトナヴァルの愛馬を見るアスベルに、レトナヴァルは心からうなずいた。そして少し会話しただけで、彼とは価値観が近い事に気付いた。相手もそうなのだろう。だんだんとうち解けてきたのが分かった。しまいには、普通にタメ口で話していた。

しかも訓練そっちのけで。
「年上にタメだぜ、俺。こんなのエンディ以外で初めてだよ」
「姉君にはタメなのか？」
「ああ。年子だしな」
「となると、エンディラ殿は十九なのか」
「レトとは二つ違いだよ。よかったな、年あんま離れてなくって」
「まあな」
和やかな会話が続く。そしてレトナヴァルは一番気になることをアスベルに聞いてみることにした。
「アスベル」
「なんだ？」
「その……エンディラ殿はどうしてあの年まで独身なんだ？　時代の帝王になるからか？」
「婚約者がいたからだよ」
レトナヴァルは息をのんだ。そんなの、聞いたことのない話だった。アスベルもレトナヴァルの顔を見て悟ったのだろう。いけねっと呟いて口を押さえた。
「エンディに聞いてねえの？」
「……あの謁見以来顔も見ていない」
「マジかよ」
アスベルはポカンと口を開けた。しかしすぐにその蒼い瞳を好奇心で輝かせた。
「じゃあさ、結局のところレトはエンディのことどう思ってるわけ？」
ぶっちゃけちゃえ。
レトナヴァルは困った。彼の蒼い目に映るのは、他人の好きな人を知りたいという純粋な好奇心――――悪く言えば他人事だし責任ないから楽しそうだしというものだ。
レトナヴァルはそれを瞳に宿す者を他にも知っていた。おせっかいな姉と妹である。

「レト？」
心底楽しそうにアスベルはレトナヴァルの名を呼ぶ。
その時だった。
「ベルお兄さまー」
鈴を転がしたような澄んだ美しい声が響く。そしてひょっこりとシェスラが現れた。彼女はアスベルを見つけると、ぱっと顔を輝かせた。しかし隣に立つレトナヴァルを見ると、可愛らしく首をかしげ、そしてすぐにはっと理解した。
「ごきげんよう、王太子殿下」
シェスラは皇女にふさわしい優雅な礼をした。そしてにっこりと微笑む。気のせいか、うっすら頬が紅潮している。それに肩で息をしていた。
「どうした、シェスラ？」
「お姉さまが……エンディお姉さまがいないんです」
驚いた二人は、シェスラから事情を聞いた。エンディラの部屋を訪れたシェスラ、しかし部屋にいない。ステラもいない。監督を任されていたヴァルドシュタールの侍女も知らない、とのことだった。
しかし事情を聞いたアスベルは気が抜けたような顔をし、レトナヴァルは慌てた。
「失踪かっ！」
「……散歩じゃね」
呆れたように、しかし楽しそうにアスベルが言う。レトナヴァルは一瞬言葉を失ったが、しかし冷静に考えるとそうかもしれないと思えた。
「ベルお兄さま？」
「大丈夫だ。エンディにはステラも付いてるしな」
気楽に言ったアスベルを、レトナヴァルは苦笑して見つめる。
そしてアスベルに何かを言おうとして――――――、しかしすぐに口を閉じた。アスベルも気付いたのだろう。真剣な顔になっている。

どこからか楽しげな子供の声が聞こえていた。
「……リィリィ？」
レトナヴァルが呟いたのは、ヴァルドシュタールの末の幼い姫の名前だった。

第7章

ヴァルドシュタールに来てから、エンディラは毎日散歩をしていた。

朝は日の出より早く起き、そして一人で黒いシンプルなドレスを着てふらふらと部屋を出る。扉ではなく、窓から。

もちろん理由は扉の前に衛兵がいるからだ。見つかったら面倒なことになるということを、エンディラは充分知っている。

そして庭を一人でぶらぶらと歩く。そして日が高くなると木の下でぼーっとしたり、本を持ってきて読書したりする。そんなことをしていると、あっという間に時が立ち夕暮れになっていたりする。だからおとなしく部屋に戻る。エンディラはそのスパイラルを続けていた。

しかしそれも一日目でステラにこっぴどく怒られ、二日目からはステラも同行した。それでもエンディラはすることを変えなかった。

そして七日目。エンディラは読書中、ふいに顔を上げた。あいかわらず無表情だ。どこからか泣き声が聞こえた気がしたのだ。

「エンディラ様？」

縫物中だったステラも顔を上げる。困惑気味にエンディラを見つめた。

「……誰か泣いていないか？」

「え……。あら」

エンディラは立ち上がった。そしてスタスタ歩きだす。ステラは慌てて裁縫箱に針と布と糸をしまい、抱えて追いかけた。エンディラより一つ年上のステラだが、エンディラの歩みの速さに内心舌を巻いた。他の姫――――例えばシェスラとか――――に比べてフリルやらリボンやらが皆無のシンプルすぎるドレスだからか、本来動きやすい服装のステラなんかより全然動きが速い。もともとの運動神経もあるかもしれないが。

そんなエンディラに、裁縫箱を抱えたままのステラが追いつけるはずがなかった。
最初は小走りに、しかし最後はもう全力ダッシュでエンディラを追いかけ、やっと追い付いた時だった。エンディラは突然立ち止った。
「……エン、ディ、ラ……様？」
息も絶え絶え、肩で息をしながらステラはエンディラの顔を見る。エンディラの研ぎ澄ました刃のような美貌は、まっすぐ前を向いていた。ステラもそっちを見て、あ、と声を出した。
幼い少女――――六、七歳前後の女の子が、木の下で丸まって肩を震わせていたのだ。
「……リィンリスティーア姫様」
「……王室の末の姫君か」
ステラの呟いた名前に、エンディラは少女の正体を知った。
するとエンディラはすたすたと少女に近付いて行った。あっけにとられてステラが見守る中、エンディラは少女に近付くと、隣に跪いた。ちょうど、目線が少女と同じになるように。
「どうした？」
あいかわらず無表情で、そして冷淡な声だった。少女はぴくんと小さな体を震わせて、恐る恐るといったふうに顔を上げる。黒曜石のような大きな瞳が、まっすぐにエンディラを射抜く。その目がエンディラの冷たい光を放つ紫水晶の瞳を見ると、よりびくっと震える。
「驚かせてすまない。私の名はエンディラだ」
エンディラはあいかわらず無表情で告げる。しかし名を聞いたことで少女の身体から緊張が抜けるのが分かった。
「わ、わたしはリィンリスティーア、です」
たどたどしい口調で少女は名乗る。
「おにいさまや、おねえさまは、リィリィとよびます」
「そうか。私もそう呼んで構わないか？」

「はい」
リィリィはうなずくと、にっこりと笑った。エンディラは笑いはしないものの、少しだけうなずいた。
それからステラも近付き、名乗った。もうリィリィはエンディラにべったりくっついていて、色々お話ししてくれた。なぜかエンディラの膝の上に座っているのだ。エンディラはどうしてステラのような明るいお姉さんではなく、自分のような無表情無愛想女にリィリィが懐くのか疑問だった。
そんな時だった。リィリィがふいに違う方向を見て、ぱっと顔を輝かせた。
「おにいさま！」
エンディラもそっちを見て、おやと思った。
アスベルにシェスラ、それから――――――
「ここで何している？」
我が婚約者殿――――――
皮肉気に思って、エンディラはリィリィを膝から下ろし、立ち上がる。そして近付いてくるレトナヴァルを、無表情で見返した。
「貴殿に報告する義務などないだろう」
あいかわらず、冷ややかな声と目でエンディラは言い放った。

第8章

冷ややかにこっちを見るエンディラに、レトナヴァルは小さく唇を噛みしめた。

こんなこと言いたいんじゃない。

だけど、レトナヴァルは次を継ぐことは出来なかった。

「そーいえばさー、明日、夜会あったよね」

レトナヴァルの後ろで、アスベルが呑気ににやにや笑いながら言う。その目を見れば分かる。彼は楽しんでいる。レトナヴァルは内心舌を巻く。アスベルは姉以上に曲者だと思う。まあでも、厄介さで言えば断然姉の方が上だろう。

「わたくしも一週間前に仕立屋が来ましたわ。明日には作ったドレスがつくといわれましたわ」

「エンディ様のところにもいらしました。しかしエンディ様がいらっしゃらなかったので私が勝手にサイズを言って作っていただいてますわ」

アスベルに続くように、シェスラとステラが言う。ステラの場合、エンディラが採寸やらドレス作りなどを好まないのを知っているので、事前に彼女が適当に済ませるのだ。しかし適当と言っても、彼女の適当は完璧だった。どのドレスも、エンディラの身体にぴったりだった。

「姉上が……フラシレア姉上と妹のセネフィラがぜひとも参加してほしいらしくてな。父も賛成してな。だから、すぐにでもと仕立屋が向かったんだろう」

レトナヴァルの見解に、アスベルが楽しそうに笑う。

「面白い家族だな―」

しかしエンディラはあまり面白く思えなかった。

もともと夜会は好きではないのだ。

そう思うエンディラにレトナヴァルは複雑な気持ちで見つめた。

彼女があまり賑やかな場所が好きではないということは、『剣』から聞いている。まだ物心つく前から、祖母であった先々代皇帝、通称『殺戮の女傑』と呼ばれたティルレシアに色々と叩きこまれたという。赤子の時から子守歌代わりに歴史を聞かされ、読み書きができるようになったら地理を覚えさせられたらしい。

そんな幼少期、エンディラはほとんど軟禁状態だったらしい。

それに比べればアスベルは自由に育ったと聞いた。しかしそれでもやるならとことんやれという女帝の教育で、三歳のころから（暴れ）馬に乗せられ、あやうく落馬で死にかけたこともあるらしい。それに剣の手ほどきも祖母にしてもらったと。

しかしそんな二人とは違い、双子のセシルとシェスラには祖母は見向きもしなかったらしい。それにエンディラとは血はつながっていないが、アスベルと双子の母であった先代皇后には非常に冷たく接したらしい。

この報告を聞いた時、レトナヴァルは心底この国に生まれてよかったと思った。それに自分の生活にそれまでは反感を持っていたが、聞いて以来全く苦にならなくなった。

自分よりもっと辛い立場の人間がいる。自分なんてまだまだ――

――

そう思うと、自然と反感は消えていった。

「とりあえず、そういうことだ」

レトナヴァルはそう言うと、くるりと踵を返した。

明日が、ちょっと楽しみになった――――

その口元には少しだけ、笑みが刻まれていた。

残されたエンディラはぐずるリィリィと少し一緒に居て、それから迎えに来た侍女にリィリィを渡して別れ、エンディラはそのままステラに引きずられて部屋に戻った。

本当は戻りたくなかったのだが、ねちねちとステラが言うのでしょうがなくだ。
色々あってようやく一人になったエンディラは、小さくため息をついた。
（……夜会、か）
昔から、あまりいい思い出は無い。たいていの人は、シェスラとエンディラを比較するのだ。そして豪奢な扇子で口元を隠して冷笑を浮かべる。
「まあ、なんて陰気なお姫様」
それでも、我慢して夜会に出席を続けた。彼が、いたから。
無愛想な自分でも、綺麗に着飾れば少しでも彼に近付ける。そう思ったから。
しかし馬鹿な貴婦人たちに比べ、男の貴族は誰が次の皇帝になるか分かっていた。だから、媚びへつらうようにして、自分の妻や娘のことを謝る。しかしそんなことをされても、エンディラは嬉しくもなんともなかった。
そんな夜会に出る？　彼もいないのに？
断ろう――――
エンディラはステラに少し申し訳なく思いつつ、しかし強固に決意した。

第9章

なんでこんなところに居るんだろうか……

華やかに着飾った人々、青、赤、黄、緑――――――。様々な色合いがエンディラの目に映る。彼らが動くたびに、その光景は色を変える。正直に言うと、エンディラは興味がないので皆同じ顔に見える。

結局、ステラに泣きすがられたので断れずに来てしまった、夜会。エンディラは今朝届いた黒の少し紫が混じるドレスをまとって、ここにいた。

ヴァルドシュタールの大広間は、ビルマーダとはずいぶん違う。絢爛豪華な調度品――――そんなものばかりで作られたビルマーダの大広間とは似ても似つかない。ビルマーダに比べれば、見た目は劣る。しかし品よくまとめられた豪奢すぎない調度品を見て、エンディラはビルマーダのよりも気に入った。

実を言えば、紫紅戦争二年目ぐらいから大広間の調度品を現金に換金して軍事費用に当てたりしていた。

ふとエンディラは、大広間の中央でくるくる回る青いドレスをまとった金髪の少女を見つけた。壁の花と化していたエンディラでも、彼女の姿はハッキリと見えた。相手は同じ金髪で、少女と似ている顔立ちの少年――――――セシルとシェスラだ。

「さすが『帝国の華』ですわね。美目麗しいことですわ」

エンディラの隣で、エンディラと同じように壁の花とかしていた一人の令嬢が呟いたのが聞こえた。その令嬢は明るい薔薇色のふわふわとしたドレスをまとったエンディラと同じ黒髪の、しかし少し茶がかった髪をした、エンディラと同じぐらいの年頃だった。

思わず彼女を軽く見たエンディラは、軽く固まる。令嬢はそんな

エンディラに気付くと、にっこりと微笑んでドレスを軽くつまんで礼をする。彼女の正体に気付いていたエンディラも、同じように――――とはいかないが礼を返す。エンディラの黒の飾りが少なめのドレスが、エンディラの動きに合わせてなめらかに動く。
「初めまして、エンディラ様」
「お初にお目にかかる、セネフィラ殿」
エンディラの言葉に、セネフィラはちょっと目を困らせて、しかし楽しそうに言う。
「エンディラ様、わたくしはあなたより二つも下ですし、それにあなたはわたくしの兄の婚約者ですわ。もっと気軽に、『フィラ』と呼んで下さいな」
「しかし……」
無表情で淡々と返そうとしたエンディラの耳に、彼女の鈴を転がしたような可憐な笑い声が届く。
「ふふふ……。お兄さまが言っていた通りの御方だわ。お姉さまも、さぞ会いたいと思うに違いないわ！」
「セネフィラ殿？　――――フィラ殿？」
一度彼女の名前を呼んでから、しかし彼女にじーっと見られたので、エンディラは言いなおす。エンディラの言葉に満足したセネフィラは、ふいに顔を横に向ける。
「ねえ、そうでしょう。お姉さま」
「ええ。その通りだわ、フィラ」
タイミングを合わせたように、人垣が割れて新緑色のドレスを着たセネフィラと同じ髪色の女性が現れる。第一王女で貴族の一人に降嫁した、フラシレア王女だ。
「お久しぶりね、お姉さま」
「そうね、フィラ。こちらが、エンディラ様ね」
軽く礼をするエンディラを見て、フラシレアはにっこりと微笑んだ。エンディラは軽く目を伏せながら、しかしフラシレアとセネフィラを比べて少し驚く。

なるほど……。よく似ている。
髪の色も同じだが、顔かたちもとてもよく似ていた。しかし昨日会ったリィンリスティーアとはあまり似ていない。それにレトナヴァルとも。
「わたくしとフィラはよく似ているでしょ？　エンディラ様」
「はい」
「ねえ、エンディとお呼びしてもかまわなくて？　さっきアスベル様がそう呼んでいるのを聞いてので……」
「構いません」
「もう少し力を抜いてもいいんですのよ」
「……はい」
「お姉さまがそう呼ぶんでしたら、わたくしは『エンディお義姉さま』と呼びますわ！　よろしいでしょうか？」
「……構いません」
わいわいとする姉妹に戸惑いを覚えつつ、エンディラは答えた。
「ねえ、エンディ様。エンディ様は踊られないのですか？」
「相手がいませんから」
エンディラがこの手をゆだねていいと思えるのは、一人だけだ。しかし彼は、ここにはいない。だから、エンディラは踊る気はさらさらなかった。
そんなエンディラを少し困ったように見つめるセネフィラは、ふと中央の方で誰かと踊っている兄・レトナヴァルに気が付いた。しかもその相手は、シェスラだ。セネフィラは面白くなかった。この綺麗な未来の姉と一緒に居なくてはならないのは、自分の兄なのだ。それを放って、しかもその方の妹と踊るなんて……。セネフィラは小さく頬を膨らませた。この馬鹿お兄さま。
フラシレアは妹が何を考えているのかすぐに分かった。彼女自身もちょっと思っていたことである。
さてはて、どうしましょう？
そう思っていた時だった。

「フラン」
愛称を呼ばれて振り返ったフラシレアは、ぱあっと顔を輝かせた。
「ランドルフ」
自分の旦那を見たときに、フラシレアの頭に妙案が閃いた。そして素早く旦那に耳打ちして了承を得ると、すぐにエンディラに向き直った。
「エンディ様。わたくしの旦那と、踊ってみませんこと？」

第１０章

「……はあ？」
たっぷりと間を開けて、エンディラは聞き返す。しかしフラシレアもランドルフも、そして一瞬ポカンとしたセネフィラも、にこにこしている。
「大丈夫ですわ。ランドルフはリードが上手ですもの。一度踊ってみたらどうかしら？」
「いや、私は……」
「そうですわ、エンディお義姉様。レッツトライですわ！」
「遠慮す」
「僕は一向に構わないですよ、姫君」
三人から言われ、エンディラはランドルフに手を行かれて中央の方にやって来てしまった。色々な人の刺すような視線を感じた。特に、ご婦人方から。
「貴殿は女性に人気があるのだな。フラシレア殿も大変だろう」
「それは君にも当てはまるんじゃないかな。その仏頂面さえやめたら、絶対可愛いと思うよ。だってその無表情の今でさえ、君のことをちらちら見てる人達はいっぱいいるんですから」
「まさか」
エンディラは切り捨てるように言った。そのときでさえ無表情だ。踊るために少し身体が密着状態になったランドルフは、本当に残念に思った。
「笑えばいいじゃないですか」
「なぜ」
「ほら、その顔。姫の顔はまるで氷の彫刻みたいだよ」
「よく言われる」
音楽が流れた。アップテンポだが、単純なワルツだ。二人は流れるように踊り出す。まわりが感嘆に息をつく中、しかし二人の周り

の空気だけが違った。
「顔の造形は、シェスラ姫より君の方が上だよ。ただ、明るい性格の彼女だからか、より美しく見えるんだろうね。君は暗いって言うより、怖いんだよね。シェスラ姫が華なら、君は刀だよ。刃ってかんじ」
「それを言うならフラシレア殿とセネフィラ殿は鳥だ。自由で気高く羽ばたく鳥」
「捕まえるのは、とっても大変だったんだよ」
そう言いながら、ランドルフは楽しそうに笑った。
そして、曲が終わった。
拍手の中、フラシレアとセネフィラのもとに戻ったエンディラは、二人のにこにこした笑顔に迎えられた。
「素晴らしかったですわ！　エンディ様」
「本当に！　ランドルフお義兄さまも、エンディお義姉様もとーっても素敵でしたわ！！」
二人は口々にエンディラとランドルフを称賛した。しかしすぐにフラシレアはランドルフとともに中央へと赴く。
「お姉さま、ちょっと嫉妬なさったんだわ。無駄なことなのに」
お義兄さまは、お姉さまにベタ惚れだもの。
そう言ってくすくす笑うセネフィラ。その隣で幸せそうな二人の姿を見ながら、エンディラは彼を思った。
あの時の自分も、ああいうかんじだったのだろうか？
「あの、エンディラ姫」
ふいに誰かから声をかけられ、エンディラは紫水晶のような目を鋭く動かした。知らない二十歳前後の男が立っている。彼はエンディラに睨まれ（勘違い）、少し萎縮していた。
「何か用か」
「あ、えっと……その」
もじもじしている男に、エンディラは早くも興味を失った。つまらない。相手にするだけ時間の無駄。

ふと、エンディラはバルコニーに出て行く二人を見つけた。一人は柔らかい栗色のふわふわした髪の可愛らしい少女、もう一人は黒い服でしかし片腕の袖に手が通っていない少年。少年のほうは誰だかすぐに分かった。アスベルだ。

「あれはベリーヴェル侯爵令嬢のローズマリーですわ、エンディお義姉様。とってもいい子ですの」

エンディラが見ているのに気が付いたセネフィラが、軽い解説をくれた。

エンディラは内心ほっとした。アスベルは腕がない。そこを含め彼の全てを受け入れてくれるような娘こそ、アスベルにはふさわしい。あのローズマリーという少女がそうであることを、エンディラは願った。

「い、い……一緒に、踊っていただけませんかっ」

近くでした突然の大声に、エンディラはすぐさまそっちを向いた。さっきの男が言ったらしい。誰に？　と考える必要などなかった。彼はエンディラの名を呼んでいたのだ。

「まあ」

セネフィラが口元に手を当てて、しかし澄んだ緑色の瞳は好奇心にキラキラと輝いていた。

それに、彼の大声のせいでかなり注目を浴びている。断りにくい。エンディラは少しだけ困った。

「レジヴェール公爵のご子息ですわ！　エンディお義姉様」

セネフィラの捕捉で、エンディラはさらに困った。

（断りにくい――――――）

そんな時だった。

セネフィラがまた口元に手を当てた。声は出さなくても唇の動きで何と言っているか分かった。まあ、やっとですわねこのへたれ馬鹿、だ。

「すまない、ジャスティン。彼女と次に踊るのは俺なんだ」

そう言って横から現れ、エンディラの腕を掴んだのはレトナヴァ

ルだった。

第11章

時は少しだけ前――――

レトナヴァルはずっとアスベルとくっちゃべっていた。この年下の新しい友人とはそりがかなり合うので、話していると面白いのだ。

「レトは誰かと踊るきないねえの？」

「ない」

「即答かよ」

アスベルはけらけら笑う。暗に「エンディと踊ってくれば？」と言いたいのが分かり、レトナヴァルは複雑な気分になる。

正直、彼女はよく分からない。

そんなレトナヴァルとアスベルのもとに、青い服の少年と少女が近付いてきた。二人とも輝かんばかりの美貌で、周囲の目を引いていた。少女のほうはレトナヴァルも知ってたので、少年の方が誰だか分かった。

「こんばんは、シェスラ殿。初めまして、セシル殿」

「こんばんは。レトナヴァルさま」

「こ、こんばんは……」

にっこりと返したシェスラとは違い、セシルの方は少しオドオドしていた。もともとの性格なのだろう。

「なあ、シェスラ」

「はい？」

アスベルが何か企んでいるような顔でシェスラに話しかける。シェスラもそれを感じ取ったらしく、少しだけ身構えている。

（何する気だ？）

レトナヴァルも少し身構えた。

そんな二人に、アスベルはにこにこと告げる。

「レトと踊ってくれれば？」
「「は？」」
見事に二人揃って返した。
「だって暇だろ。二人とも」
ちょうどいいじゃん。
アスベルはそう言って、どこかに消えて行った。その後ろ姿を見送ったレトナヴァルとシェスラは、互いに数秒固まってからおずおずと手を伸ばす。
「行きますか」
「……はい」
レトナヴァルの言葉に天使のような笑みで返したシェスラを見て、レトナヴァルは心底思った。

似てなっ

レトナヴァルの脳裏には黒髪の鋭い美貌の女性が浮かんでいた。

踊り終えたレトナヴァルとシェスラは、少し二人で話していた。というのも待っていたはずのセシルがヴァルドシュタールの貴族令嬢たちに捕まって姿を消していたからだ。その様子を、二人でからかいながら談笑していたのである。
「レトお義兄さま、あれ」
シェスラが笑みを浮かべながら指す方を見ると、なんとアスベルが栗色の髪の可愛らしい感じの令嬢と談笑しているのが目に付いた。
「意外ですわ。ベルお兄さまは、あまり女性がお好きではないから」
心底意外そうなシェスラに、レトナヴァルも同感だった。
「彼女はローズマリーですよ。セネフィラ、妹の友人でね。とって

もいい子ですよ。心優しい穏やかな性格なんで」
「安心しました」
ベルお兄さまが変な女性に捕まらなくて。
そう言うシェスラに、レトナヴァルもうなずいた。
すると、またシェスラが声を上げる。今度はもっと意外そうだった。
「まあ。見て下さいなレトお義兄さま。エンディお姉さまが……」
つられて見たレトナヴァルの笑みが、その瞬間凍りついた。
エンディラが男と踊っている。流れるように。
男の方は知っていた。自分の義兄だ。
ただ、どうしようもない怒りと何かがこみ上げてくるのを感じた。
「お義兄さま？」
隣のシェスラが困惑顔で何か言っている。しかし頭に入らなかった。レトナヴァルの頭にあるのは、エンディラと義兄の踊る姿だけ。
「あっ！　レトお義兄さま？　何処に行かれるんです！？」
気が付けば歩きだしていた。そしてまた目の前で知り合いの男がエンディラに踊りを申し込んでいるのを見た瞬間、レトナヴァルは彼女の腕を掴んでいた。

「すまない、ジャスティン。彼女と次に踊るのは俺なんだ」

セネフィラが視界に入った時、彼女の唇が何かを紡いでいるのに気が付いた。それを読むと、「まあ、やっとですわねこのへたれ馬鹿」。
余計な御世話だ。
レトナヴァルは唇の動きだけでそう返した。

第12章

いったい何がどうなった――――

突然のことにメンを食らい反応が遅れたせいで、レトナヴァルに手をひかれて広間の中央に来てしまった。時はすでに遅く、エンディラが何か言おうとしたちょうどその時、曲が流れだす。アップテンポの難しい曲。

つい反射的に身体を動かしたエンディラは、レトナヴァルを少し不穏に思った。

「なぜだ？」

「何が」

尋ねれば、キツイ声が上から降ってきた。身体が密着状態なので、見下ろされているのを自覚するとちょっとイラッときた。

「なぜ私と踊っている？　と言う意味だ。わざわざ言わなければ分からないのか」

「ああ悪いね。分かんねえよ」

「なら今分かったはずだ。言え」

「……理由がいんのか？」

「いる」

「……」

レトナヴァルが黙る。その間も二人の身体は曲に合わせて流れるように動く。しかし二人は踊りに合わせて気持ちも合わせるどころか、全く夜会には不要な空気を醸し出して周りの人々を正直ちょっとひかせていた。

「俺達、婚約してるよな」

「だからなんだ」

無表情で淡々言うエンディラに、レトナヴァルは頭を抱えそうになった。

「いや、踊りに婚約者誘っちゃ駄目じゃねえだろ。普通……」
無表情で見るエンディラに少し圧倒されて、レトナヴァルの語尾が小さくなる。彼女の切れ長の紫水晶の瞳は近くで見れば澄んでいて、それになぜか深い悲しみと絶望が見て取れた。
明るくて大きいシェスラ殿の青い瞳よりも、こっちのが綺麗だ――――
ふいに思ったことに、レトナヴァルは唖然とした。そして慌てて思ったことを打ち消すかのように頭を振った。
その後はっと気付けば、エンディラがうろんな目付きでこっちを見ていた。
「……そうだな」
「はい？」
「貴殿の言うとおり、だと思う。すまない」
セリフが悲しいまでに棒読みだ。しかし次の瞬間レトナヴァルは瞠目した。
エンディラの口元と目元がほんの少し――――本当にほんの少し、超とっても少し――――――緩んでいた。
（？　……もしかして、笑った！？）
しかしそう気付いた時には、もうエンディラの顔はいつも通りの無表情に戻っていた。ちょっとだけ残念に思った時、まるではかったかのように曲が終わる。
「……それなりに楽しかった」
嘘だ。
そう言えるような声音で言い残し、エンディラは去っていく。その後ろ姿に名残惜しさを感じながらも、レトナヴァルは彼女を引きとめることは出来なかった。

第13章

憎い――――
その姿を見るだけで、どす黒い物が体中から溢れだした。

あいつさえいなければ。

そう思えば、自然に口元に笑みが上がる。
そうして声を上げずに静かに微笑んだ。

夜が明ける前に夜会はお開きになった。
エンディラはフラシレアやセネフィラと明日の午後にお茶会をするという約束をさせられてから、ようやく部屋に戻ってこれた。もう明け方近い。エンディラは疲れ果てて、適当にドレスを脱いですぐに寝台に横になった。
（疲れた……）
目を閉じれば眠りはすぐに訪れた。エンディラはすぐに眠ってしまった。

「おかえりなさいませ、レト様」
自室に戻ったレトナヴァルは、女官のメアリと侍従のルドウィックに迎えられた。
「『剣』からの連絡がございます」
「なんだ？」
「不穏な動きが予想できると。誰と想定は出来ない、ということで

す」
「気をつけろと言っておけ」
吐き捨てるように言ったレトナヴァルに、ルドウィックが軽く目を見張る。
「どうかしましたか？」
「何だ？」
「様子がおかしいようなので」
「……」
「あの御方と何かありましたか？」
ルドウィックはレトナヴァルの表情を見て確信した。間違いない。何かあった。
彼は自分の主人の素直なところが好きだった。他にも彼の主人は真面目で誠実で、そして嘘がつけないぐらい色々顔に出ることや、それから非常に不器用で、女性が苦手だということなどなど。
それでも紫紅戦争のさいは『戦場の鬼人』と呼ばれるほどの活躍を見せたが、しかし裏では泣いていた。
殺した敵、殺された仲間に対して彼はずっと「ごめん」と言っていた。
知っているのは自分と、医者としての心得もあったため同行していたメアリだけだろう。
なのに、絶対に兵士たちの前では泣かなかった。「指揮官が動揺したら、困るし弱気になんだろ」と言って、いつも彼らの前では完璧な王子でいた。
だからルドウィックもメアリも、自分の主人のことが好きだった。
幼い頃から彼に仕えているせいか、レトナヴァルも二人のことは信頼してくれている。実際にはもう一人いるのだが、ルドウィックもメアリもその人についてはあまりくわしくなかった。
ルドウィックとメアリの前では、レトナヴァルは完璧な王子ではなかった。べつにへたれでもいいのだ。彼らの前では。そう思ってくれているのが分かって、二人は嬉しかった。

「レト様、何があったんです？　というか、お話しできましたの？
先日あんなに落ち込んでいらしていましたし」
「……話はした」
「なんて？」
メアリの目がキラキラと輝いてきている。彼女の生物学的には――――本人に言うと怒られるが――――――女なのだとレトナヴァルもルドウィックも改めて思い出した。
「……お前の期待しているようなことはないぞ」
「まあ。駄目ですわねえ、へたれ王子」
「るせえ」
「セネフィラ様にも言われませんでした？」
「……」
「まあ、言われましたの！？」
「うるせえ！」

こうして、夜は明けた。

第１４章

「エンディ様、エンディ様は黒以外はお召しになりませんの？」
「……持っていないので」
「まあ！　本当ですの？　ステラ」
「はい。黒以外の服を作ったら町に売りに行ってしまったことがありましたので、それ以来作っていません」
「ステラ」
「本当ですのよ。エンディお姉さまったら、三年前からもうまっ黒けなのですの」
　エンディラに与えられた部屋で、エンディラ、シェスラ、フラシレア、セネフィラ、ステラの五人でお茶会が催されていた。オレンジ、黄緑、水色という華やかでやわらかい色の三人の姫君のドレスに対し、エンディラだけはいつものように黒いドレスだったのでフラシレアがそう言ったのだ。
「エンディお義姉様なら、きっと紫とか黄色とかお似合いになられますわよ」
「興味無いので」
「じゃあ、いったいなにがお好きなのです？」
「エンディお姉さまが好きなのは本ですの」
「まあ！」
　楽しげな様子の三人に、エンディラはこっそりため息をついた。幼い頃からこういうことに参加することは無意味だと祖母に教わっていたので、何を話したらいいのかさっぱり分からなかった。
『お前はただの貴婦人ではないのです。エンディラ、お前はわたくしのような国主になる者ですから、ただの貴族のようでは駄目なのです』

幼い頃から耳元で説かれた言葉。昔は意味が分からなかったが、今なら分かる。
しかし、現在ではどうなのかは分からない。
ビルマーダは一子相伝。二子以降には何も教えるものはない。よって今、ビルマーダ帝国の王位継承権を持つのはエンディラだけだ。彼女を殺せば、謀反を起こそうと企むものはいなくなるだろう。アスベルやシェスラ、セシルでは駄目なのだ。
エンディラでなくてはならない。
高い矜持を持つ帝国人は絶対に他の者では許さない。
そう決まっているから。
帝国人は蛮族とさげずんでいたヴァルドシュタールに服属することを認めないだろう。今、彼らが大人しいのは、エンディラ達皇室がヴァルドシュタールに身柄があるからだ。今はまだいい。しかし時がたてば不満は爆発するだろう。
だからこそのエンディラとヴァルドシュタール王太子レトナヴァルの婚約なのだ。
他国に嫁いだエンディラは、自動的に王位継承権外となる。彼女の子供は持つことが可能だが、しかしそれもヴァルドシュタールの子でもある。
ビルマーダにはもうどうしようもないのだ。
蛮族とさげずんでいた者達に、大人しく指をくわえて国が盗られるのを見ているしかない。他に方法はない。
「ねえ、エンディお姉さま」
思考にふけっていたエンディラは、シェスラの可愛らしい声ではっとした。見るといつの間にかテーブルにたっぷりとお菓子が乗っている。さっきはなかったものだ。
「お菓子がきましたわ。いただきません？」
「……そうだな」
エンディラは少しテーブルの上に目を動走らせてから、一つの菓子を手に取った。黒く焼かれた焼き菓子で、中に干した果物が入っ

ている。あまり美味しくはなく、貴婦人や令嬢たちには不人気なお菓子だが、エンディラはなぜか気に入っていた。別に好きではないのだが、誰も手に取らないからこそ気に入っているのだ。

それを口に放り込むと、独特の苦みが口の中に広がる。その瞬間、エンディラはハッとして、持とうとしていたティーカップを落とした。

パリィンという音とともに紅茶が床に広がる。

「エンディ様？」

「エンディお義姉様？」

「エンディお姉さま？」

「エンディラ様？」

困惑してエンディラを見る四人の前でエンディラは椅子から落ちて床に倒れた。

第15章

レトナヴァルがその報告を聞いたのは、執務の最中だった。机に向かってたまった仕事を片付けているのだ。そんな中、
「殿下っ」
慌てて飛び込んできた侍従を、レトナヴァルはうろんげに見て、それがエンディラについている者だと気付くと静かにため息をついて筆を置いた。
「何だ？　またあの姫が消えたか？　それとも問題でも起こしたか？」
「姫様が、倒れました」
「そうか。適当に探しておけ……何だと？」
レトナヴァルの顔色が変わった。そんなレトナヴァルに気付かずに、従者は半泣きで言う。
「毒を盛られたようです」
その瞬間、レトナヴァルは執務室を飛び出した。

エンディラの部屋にたどり着いた時、レトナヴァルは肩で息をしていた。
「レトっ」
「お兄さまっ！」
フラシレアとセネフィラが真っ先に気付いて、レトナヴァルを見る。二人とも泣いたのか目が真っ赤だった。
レトナヴァルは二人を見ずに、部屋の中央の寝台に横たわるエンディラを見た。周りにはアスベルとセシルとシェスラが付き添い、姉を見ている。そのせいか、レトナヴァルのことに気付いていないようだった。
レトナヴァルは足早に寝台に近付いた。そこでようやくアスベル

達三人がレトナヴァルに気付く。
「レト……」
「何があった？」
レトナヴァルは鋭く聞いた。するともシェスラがゆっくりと答える。
「お、お茶会をしてましたの……。そのなかのお菓子を食べたお姉さまが……」
そう言うと、シェスラはわっと泣き出した。わんわん泣くシェスラの肩を、セシルが慰めるように叩く。
「姉上、フィラ。二人を別室に」
レトナヴァルは双子を指して言った。フラシレアはしっかりとうなずき、二人を部屋から連れ出した。セネフィラも不満そうな顔をしながらも続いた。
残ったアスベルが、セネフィラの足音が完全に遠ざかったのを確認してから口を開いた。
「エンディは、幼い頃から毒に耐性がつくように訓練されていた」
アスベルの言葉にレトナヴァルはギョッとなった。
「いつから？」
「一歳ぐらいから。女帝に。年をとるにつれて量も増やしていったらしいから、エンディは何度も死にかけてるよ。まあ、十一になったぐらいでやめたって言ってたけど。あ、でもやめさせられたのが正しいかもな。まあ、三年前から再開してたけど。だから、多分大丈夫だと思う……」
後半は声が小さくなった。不穏に思い、レトナヴァルは尋ねた。
「大丈夫とは言えないのか？」
「使った毒がビルマーダでエンディラが耐性をつけた毒だという可能性は、調べてみないと分からない。常人に比べれば全然問題ないと思うけど、それでもあまりの猛毒だったら分からない」
青い顔で首を振るアスベルに、レトナヴァルは固まった。
寝台を見れば、白い顔で昏々と眠るエンディラがいる。寝ている

時も相変わらず無表情だ。胸が少し上下しているのでまだ生きている。
「医師は何と言った？」
「とりあえずは安静にしておけって。急いで毒の種類を調べるからと。でも……」
アスベルが言葉を区切る。それから、囁くように言った。
「死ぬか生きるかを決めるのは本人しだいだって」
そう言った時、アスベルの顔がくしゃりと歪む。泣きそうだったけど、彼は泣かなかった。
「……エンディ、死ぬのかな……？」
「馬鹿言うなっ」
レトナヴァルは慌てて叫んだ。しかしアスベルが顔をそむけながら言う。
「だって、エンディずっと死にたいみたいなこと言ってたし……」
「なん、だと？」
初耳だった。アスベルははっとして口を押さえる。
「おい、今の……」
どういうことだと聞こうとしたレトナヴァルの耳に、うめき声が届いた。ぱっと見れば、エンディラが珍しく顔を歪めている。いかにも苦しそうだ。
「医師！」
思いっきり叫んだときだった。

「デュラス……」

小さな声だった。
しかしそれでもレトナヴァルはハッキリと聞こえた。アスベルもそうだったようだ。彼はレトナヴァルと目が合うとさっとそらす。
「アスベル……」
無言で圧力をかけて、アスベルは少ししして口を開いた。

「デュラス・アレイス・ガルフォード」
アスベルの紡いだ名前に、レトナヴァルはひっかかった。そしてふと思い出した。
『我が名はデュラス・アレイス・ガルフォード！』
理解して愕然となるレトナヴァルに気付かずに、アスベルは告げた。
「エンディの婚約者だった男だよ」

第１６章

アスベルから告げられた名と、その者がエンディラにとってどういう者だったかし知ってしまったレトナヴァルは沈黙した。
レトナヴァルはエンディラの寝顔を見た。さっきはとても辛そうで、玉のように汗をかいていたというのに、名を呟いてからは少し顔が楽になっていた。
それを見れば、彼女にとって『デュラス』という人物がどういう者だったか分かった。
ふいにレトナヴァルは彼女の汗で湿った黒髪が額に張り付いているのに気付いて、思わず手を伸ばした。しかし自分の指を見て、ぎょっとなった。

ほんの一瞬、指に血が付いているのが見えた。

もちろん錯覚だ。しかしそれでも、自分が血に塗られた人物であることは変わりない。
（……俺には、彼女に触れる資格なんかない）
レトナヴァルはそっと手をひっこめた。
「レト？」
「……姉上達を、戻してくれ」
レトナヴァルはそう言って、部屋を出た。
しかし少し歩いて、思わず耳を塞いだ。

『デュラス……』

彼女の呟きが、耳から離れなかった。

エンディラは霧の中を歩いていた。
深すぎる霧のせいで、一歩先すら見えなかった。
けれど不思議と怖いと思わずに、エンディラはずんずん前へ進んだ。
『姫様』
ふいにどこからか、懐かしい彼の声が聞こえた。思わず足を止めたエンディラは、あたりをきょろきょろと見回す。しかし、何も見えなかった。
「デュラス？　いるのか！？　デュラス！！」
いつも何があろうと冷静でいるエンディラが、珍しく声をあげた。そしてまた、歩き出した。しかしすぐに走りだし、大声で彼の名を呼んだ。
「デュラス！　どこにいる。デュラス！！」
エンディラはがむしゃらに走った。
しかし軟禁に近い生活を送っていた性格はともかく深窓なお姫様のエンディラの体力は、すぐに底をついた。
一度立ち止まり、しゃがみこんだエンディラは、ぎゅっと拳を握りしめた。
「……言ったじゃないか」
下を向けば、動きに沿って結わずにたらしたままの髪が顔を隠した。
「――――――必ず帰ってくると、言ったじゃないか」
エンディラはそう言って、一人で泣いた。
声を殺して、ただ無言で涙を流した。

上手くいった。
ゆっくりと倒れるエンディラを見て思わずほくそ笑んだ時、騒ぎ

出した女どもに苛立ちを覚えた。
うるさい。これだから女は嫌いなのだ。
まあ、でも――――――
死ぬのが望みのこの女だけは、別に嫌いではなかった。
女らしくなかったし、なにより静かだった。
だけど、今は大っ嫌いだけど。
けれど――――――
慌てて入って来た彼を見た時は、この女の喉笛を?っ切ってやろうかとさえ思った。
もし、失敗したら――――――
必ず、そうしてやる。
にたりと、口の先をあげて嗤った。

第１６章（後書き）

最近気付いたコト。
セシルの出番が全然ない。

第17章

うっすらと目を開けた時、意識はまだぼんやりとしていた。
少しずつ目を開いた時も、視界ははっきりとしなかった。
ひどく、喉が渇いていた。
寝台の横のテーブルに、水差しがあるのに気付いたエンディラはゆっくり起き上がろうとした。しかし、手で身体を支えることが出来ずに、ふかふかの寝台に倒れてしまった。
「エンディ！？」
ふいにアスベルの声が聞こえて、寝台に駆け寄って来た。珍しく顔をくしゃくしゃにしたアスベルが、すぐにエンディラに手を貸してくれて、寝台に座らせてくれた。
「大丈夫？」
「……ず――――――れ」
水をくれ。そう言ったのに乾いた唇はそう言葉を紡いではくれなかった。しかしアスベルは分かってくれたようで、テーブルから水差しを取ってエンディラに渡してくれた。エンディラはありがたくそれを受け取り、飲んだ。ゆっくりと口に含めば、その水は今まで飲んだどんな水よりも美味しく思えた。
「みんな心配してたよ」
エンディラが水を飲み終えたら、アスベルはようやくいつものように呑気な声で言った。表情もほっとしたようで、さっきの顔とは違いいつもみたいな飄々とした顔に戻っている。
「――――心配かけたな」
エンディラもあいかわらず淡々とした声で言った。
「そうだよ。どんだけ皆心配したか」
「すまない」
「……本当にそう思ってる？」
感情のないエンディラの声は、反省してるのかどうかすら分かり

にくい。エンディラはアスベルにそう言われ、コクンとうなずいた。
「でも、本当によかった」
うなずいた姉を見て、アスベルは笑顔を浮かべた。エンディラもほっとしたが、しかしふと思い出したことがあってすぐにそんな気持ちは吹っ飛んだ。
「アスベル」
「何？」
エンディラは小声でアスベルに告げた。ほっとしていたアスベルの顔がみるみる変わっていくのを見ても、しかしエンディラは話をやめなかった。
「――――――以上だ」
「嘘だろ」
アスベルは反射的に言った。しかしエンディラは首を横に振る。
「場合によっては、最悪のケースもある」
「……嘘だろ」
アスベルはまた繰り返した。
そんな時、二人ははっと気配を感じた。ちょうど、エンディラの部屋の外だ。
しかしアスベルが確認しようと近付いた瞬間、その気配はふっと遠ざかって行った。
「……何だ？」
「さあな」
「ところでさ、フランやフィラ達呼んでいい？」
「構わない」
うなずいたエンディラは、しかし数分後、やって来た姉妹にさんざん言われ、うなずいたことを後悔したのだった。

第18章

その報告を聞いた時、レトナヴァルはほっとした。
「エンディラ様が、目覚めました」
しかし次に言われた言葉に、レトナヴァルは呻いた。
「それとエンディラ様が、殿下にお話があるということです」
レトナヴァルは少し言葉を探した。しばらく試行錯誤して、一つの答えにたどり着く。あまりいい出来ではないが、少しはなんとかなるだろうと思った。
「今は忙しい。時間が空いたら」
それ以降、レトナヴァルはいつも以上にゆっくりのペースで仕事を始めた。
エンディラの会いたくないと言ったら嘘になる。無事な姿を見たいし、確かめたい。でも、彼女の呼んだ「デュラス」という人物について知ってしまった今、彼女にどんな顔で会えばいいのか分からなかった。

「時間が空いたら、か」
エンディラはいまだに寝台で病人のような生活をしていた。目覚めてから早二週間。しかしステラやその他大勢からまだ寝台にいろとわーわー言われたので、彼女はまだ自由に動くことは出来なかった。　そのかわり、アスベルが言った通りに動いてくれている。それからこの間お見舞いに来てくれたローズマリー嬢も、アスベルと同じように動いてくれた。
他にも日々色々な貴族がやって来た。しかしエンディラは名も顔も全く覚えていない。たいてい、フラシレアかセネフィラが枕元に居てくれるので、面倒な貴族がやってきたら教えてくれるので寝た

振りが出来るのだ。そのせいか、エンディラが名を覚えたのは二人だけだった。一人はローズマリー、もう一人はロイデン伯爵令嬢のレルノーラだ。

そんな日々入れ替わりで来る貴族達だが、それでもエンディラが一番会って話をしたいのはレトナヴァルだった。

アスベルが彼のことをレトアヴァルに話したと言っていた。だから、そのことについてと、もう一つ大切な件について彼と話したいのだが、しかし彼は「忙しい」と言って全く来てくれなかった。

「……勝手にやるか」

珍しく訪問者がおらず、寝室で一人になれたエンディラは一人思考していた。膝には読みかけの書物があるが、エンディラの集中は本にはなかった。

その時、ノックが聞こえてエンディラは顔を上げた。

「誰だ？」

「ステラです。紅茶をお持ちしました」

「入れ」

許可を与えられてから、ステラは部屋に入って来た。今までずっと、姉のような存在だったステラ。しかし最近になって浮上してきたことがあった。

エンディラは機会があったら聞こうと思っていたので、今がちょうどいいと思った。部屋にはエンディラとステラだけだし、エンディラは気配に敏感なので盗聴されているのなら気が付く。エンディラは紅茶の入ったティーポットからカップに紅茶を注ぎ入れているステラに声をかけた。

「ステラ」

「はい」

「お前が最近ある侍従と頻繁に会っていると聞いたが、本当か？」

一瞬、ステラの動きが止まった。しかしすぐに戻り、また流れるように動き出す。カップに紅茶を注ぎ入れてから、ステラの口が動いた。

「はい」
「どういう用件だ」
「言えません」
「ならいい。もう下がってくれ」
「はい」
ステラは一礼すると、部屋を出た。エンディラは紅茶のカップを口に寄せながら耳をすませた。ステラはそれからゆっくりと歩いていたが、少しすると軽く廊下を蹴る音が聞こえた。
エンディラはそっとカップを置き、また思考を始めた。

「ルドウィック」
名を呼ばれ、ルドウィックは振り返る。見れば侍女らしく人が走ってくるのが見えた。
「どうした？」
「怪しまれてる」
「そうか」
「それから、何か企んでるわ」
「何？」
「あと、あの人と話したいみたい。もう、行った方がいい。そう伝えてくれる？」
「分かった。いつもすまないな、ハルステラ」
「気にしないで」
ハルステラ――――――ステラは言うだけいうとすぐにぱっと身をひるがえした。その姿をしっかり見送ってから、ルドウィックも歩き始めた。

第19章

「殿下」
たらたらとした執務中、ルドウィックに呼びかけられレトナヴァルはすぐさま反応した。仕事を少しでも遅らせられるのなら、なんでも大歓迎だった。
「なんだっ」
「『剣』からの連絡です。そろそろ行かないといい加減無理でしょう」
「……お前もか」
レトナヴァルはうんざりしていた。ずっといろんな人から言われていた言葉だった。アスベルにも、フラシレアにも、メアリにも、セネフィラにも言われた。しかもリィンリスティーアからも、そしてなぜか父の王にも言われた。
「何か企んでいるみたいですよ」
「……そうか」
レトナヴァルは再び執務をたらたらと始めた。ルドウィックもそんなレトナヴァルを見て、もう駄目だと判断したらしく、もう何も言わなかった。
そんな時だった。慎重なノックとともに、控え目な声が聞こえてきた。
「レトナヴァル王太子殿下。ラース侯爵夫人の侍女でございます」
「入れ」
時々そう言われると誰だか分からなくなる時があるが、ラース侯爵夫人はレトナヴァルの姉フラシレアのことだ。入れというと、声と同じく控え目そうな女性が入って来た。手には一通の手紙の乗った盆がある。ルドウィックが立ちあがり、盆から手紙を取る。侍女は一礼して、すぐに出て行った。
ルドウィックは手紙をレトナヴァルに渡す。レトナヴァルはすぐ

に封を切り、手紙を読んだ。そして眉をひそめる。
「どうしました？」
「義兄上が、俺に会いたいらしい。ついでに、姉上も」
「行っていらしたらいいじゃないですか」
「至急、とあるからな。分かった、行ってくる」
「行ってらっしゃいませ」
部屋を出ていったレトナヴァルの代わりに、ルドウィックは素早く彼の仕事の対処を始めた。実はけっこう前から代わりに仕事をしており、彼の仕事を減らしているのだ。
「さて」
小さく呟いて、ルドウィックはペンを走らせた。

「姉上、義兄上。失礼します」
手紙に記してあった部屋にやって来たレトナヴァルは、返事をもらってから部屋に入った。中には少し困惑顔のランドルフと、腰に手を当ててご立腹気味のフラシレアがいた。
「本当にどうしようもない子ね」
「は？」
「セネフィラがへたれと言うのが分かるわ。本当になんてへたれなんでしょう」
「姉上？」
「フィラ」
レトナヴァルの言葉を無視して勝手に言った挙句、しかも隣室から彼女は彼の妹まで呼んだ。何がしたいのかいまいちよくわからないが、しかし次の瞬間、扉が空いて入って来た二人の女性のうちの一人を見て、レトナヴァルは激しく動揺した。
「お久しぶりです、殿下」
いつもより固く感じる、しかしやはり淡々とした声音で、紫水晶

の瞳を鋭く光らせて黒髪の女性――――エンディラが立っていた。

第２０章

レトナヴァルは固まった。予想すらしていなかった状況に、とっさにどう対処していいのかわからなかったのだ。
「ご協力感謝いたします、フラシレア殿、セネフィラ殿、ランドルフ殿」
本当に感謝してる？　と言いたくなるほど感情がこもっていないが、そう言われた三人は満足そうにうなずいていた。しかしセネフィラだけはぷくっと頬をふくらまして言った。
「フィラですわ。エンディお義姉様」
「……フィラ殿」
「殿はいりませんわ」
「行きますわよ、フィラ」
今だ納得してすらいなさそうなセネフィラに、フラシレアが声をかける。ランドルフはそのあとに続いて部屋を出て行った。部屋に二人きりで残されたエンディラとレトナヴァルは、特にレトナヴァルが困った。エンディラは全く動じておらず、手近な椅子に腰かけた。そして呆然と立っているレトナヴァルをちらと見やって、声をかける。
「貴殿は座らないのか」
「……座らせてもらう」
レトナヴァルは少し遅れて答えて、エンディラの向かいの椅子に座った。
しばらくは、どちらも話さなかった。だんだんと気まずく感じてきたレトナヴァルが口を開こうと思った時、ようやくエンディラがしゃべりだした。
「貴殿に、話したいことがある」
「……なんだ？」
「私に毒をもった犯人の目星がついた」

「――――なんだと？」
レトナヴァルは驚きに目を見張った。しかしエンディラは冷静そのもので、全く表情を変えることすらしなかった。
「目覚めてすぐにだいだい誰だかうすうす分かっていた。しかし証拠がなかった。だからアスベルに頼み、調べた。そして、目星がついた」
「……それをどうして教えてくれなかった？」
エンディラの独断に苛立ちを感じながら、レトナヴァルは言った。しかしすぐにハッとして、エンディラの紫水晶の瞳を見る。その瞳は静かな湖畔の如く、何も映ってはいなかった。
「私は話そうと思った。しかし貴殿は「忙しい」と言って私に会いに来ることがなかった。私も寝台を脱け出して貴殿に会いに行くことが出来なかったし、そうすることで他人に迷惑をかけることなど出来なかった」
「――――その、すまなかった。で、なぜ今日……」
「明日、犯人に事情を聞くつもりだからだ。出来れば数人、本当に数人でいい。五人未満で、腕にそこそこ自信がある者を貸していただきたい」
「数人？　武官を？」
レトナヴァルはよく分からなかった。どうせならもっといっぱい連れて行ってもらって構わなかった。
「いや、出来れば露骨に武官だと分かるような者よりも、侍従や侍女に化けられる者がいい。いるか？」
「いるが……、なぜだ？」
「犯人にバレては困るからだ」
分かり切っていることをストレートに言われ、レトナヴァルは面を食らった。そんなこと分かっている。しかしそう言おうと思った時、しかし違うことが頭をよぎり閉口した。
「……で、犯人は誰なんだ？」
エンディラが初めてレトナヴァルを見た。紫水晶の瞳と目があっ

た時、レトナヴァルは彼女の顔が泣きそうになっていると思った。いつもと変わらない無表情なのに、なぜだかそう思ったのだ。
しかし、次の瞬間、犯人の名を聞いてレトナヴァルはそのことが頭から吹っ飛んだ。
「……本当なのか？」
「間違いないと思う」
レトナヴァルは無意識に拳を握りしめた。そんなことがあっていいのだろうか？
「明日、貴殿も出来れば来てほしい」
エンディラが静かに立ち上がりながら言った。もう彼女の話は終わりのようだ。レトナヴァルがうなずいたのを確認してから、エンディラは部屋を出て行こうとした。それを見て、レトナヴァルは慌てて彼女の手首を掴んだ。
「――――――何か用か？」
「あ……」
反射的な行動だったので、レトナヴァルには説明が出来なかった。しかしすぐに言い訳を考えて、すぐさま口に出した。
「――――――それが終わったら、話したいことがある。聞いて欲しい」
「構わない」
あっさりとＯＫをもらい、少し驚きながらレトナヴァルは手首を離した。そしてすたすたと去っていくエンディラの後ろ姿を眺めた。いつまでも見ていたい。少しだけそんな欲求にかられながらも、レトナヴァルは引きはすように目を離し、急いで部屋を立ち去った。

第21章

「ねえ、セシル」
可愛い声で、シェスラはセシルを呼んだ。セシルは自分が女だったらこういう顔なのだという、セシルとよく似たシェスラの顔を見ながら首をかしげる。
「どうしたの？」
「セシルは、わたくしの味方？」
セシルはポカンとしてシェスラを見た。彼女の言う意味がよく分からなかった。しかしセシルは笑顔でうなずいた。
「もちろんそうだよ。たとえ世界中の人間がシェスラの敵に回ったとしても、僕はシェスラの味方でいるよ」
嘘ではなかった。心からの言葉だった。
そしてシェスラは、喜んでくれた。
「本当っ！　嬉しいわ、セシル！　やっぱりわたくしの片われは、わたくしのことを一番に理解してくれるのね！！」
「君だって僕のこと一番理解してるじゃないか」
セシルが思い出すのは、幼い頃のことだ。アスベルの提案で、貴族の他の子息や令嬢と一緒に広い王宮の庭園でかくれんぼをしたのだ。セシルは隠れたが、しかし鬼はいつまでたっても見つけてもらえず、気が付いたらもう空が赤くなり始めていた。探しに出るわけにもいかず、困って、哀しくて淋しくて、セシルは泣いていた。そして日が沈みかけた時、シェスラが迎えに来てくれたのだ。そして涙と泥でぐしょぐしょの顔のセシルを見て、シェスラは笑顔で言ったのだ。
『みつけたわ、セシル』
その後手をつないで一緒に帰った時、セシルは尋ねた。
『どうしてぼくのいばしょがわかったの？』
『わたくしはあなたのかたわれだもの。あなたのことならだれより

わかるわ』
『そうなの？』
『そうよ』
『じゃあ、ぼくもシェスラのこといちばんにわかるの？』
『わかるわ』
根拠などないのに、シェスラは自信満々に言った。それが嬉しくて誇らしくて、セシルはいつのまにか笑っていた。
『しんじられないなら、わたくしのいちばんだいすきなおかしをあててごらんなさいよ』
『シェスラのすきなおかし？』
『そうよ』
『……ええと、ブルーベリーのタルト？』
『そうよ！　ほらね、わかるでしょ』
『うん。ほんとうだ。そのまえはミルフィーユだったよね』
『ええ』
『そのまえはアップルパイ』
『ええ！』
『そのまえはチョコレートだったけど、あついひにたべようとしてとけて、シェスラおこってそれですてちゃったんだよね。それでエンディあねうえにおこられた』
『……よくおぼえているわね』
後半はさすがに呆れられたが、セシルは楽しかった。シェスラのことを一番に分かるのは自分。あまり感情の出ない冷静でちょっと怖い姉ではなく、いつもおちゃらけている明るくて頼りがいのある兄でもない。たいして取柄もないが、自分なのだ。
そう理解したとき、セシルは初めて自分の価値観を見いだせた気がした。
だからか、彼の一番はいつでもシェスラだった。
「ねえ、シェスラ。どうしてこんなこと言いだしたの？」
セシルは聞いた。しかしシェスラは答えてはくれなかった。自分

そっくりの顔で意味深に微笑んだだけだった。

第２１章（後書き）

久しぶりのセシルの出番。

第２２章

その日、エンディラの部屋には少数の人間が集まっていた。
エンディラ、レトナヴァル、アスベル、セシル、シェスラ、ステラに、ルドウィックとその他三名の侍従がいた。ルドウィックを含めた四名の侍従が全員レトナヴァルの用意したエンディラの希望通りの者だ。
レトナヴァルは一見お茶会に見えるこの集まりを、静かに見守っていた。しかし一体誰がエンディラのいう毒をもった犯人なのかは分からなかった。
「では、そろそろ事の本題に入りたいのだが構わないか？」
エンディラが相変わらず淡々とした声で言った。皆普通にうなずいているが、本題の意味が分からない者もいた。双子だった。彼らは今日がなんの集まりか知らないらしいとレトナヴァルは思った。うなずきながらも首をひねっている様を見て、レトナヴァルは違和感を覚えた。
「私は回りくどい事は嫌いだ。だから単刀直入聞く。シェスラ、父上が戦争の時に我らにそれぞれ渡したロケットを持っているか？」
「ええ」
「出してくれ」
シェスラは首から下げていたらしいロケットを外し、エンディラに渡した。エンディラはそれを受け取ると、次はアスベルとセシルを見る。
「私とアスベルは剣を父上からいただいたな」
「そうそう」
「セシルはなんだった？」
「馬を」
「そうだ」
レトナヴァルは黙って話を聞いていた。

「私は父上になぜ我らにこれらを渡したのか理由を聞いている。私とアスベルに剣を渡したのは、戦えということ。セシルはいざとなったらその馬で逃げろと。そしてシェスラ。お前は敵国の捕虜となったときのためだ。自らが望まぬのなら、この中に入っている毒を飲んで死ねと。そう言われただろう」

「ええ」

シェスラはうなずいた。しかし気のせいか、シェスラの手が震えているように見えた。

「開けていいな？」

「ええ」

エンディラがロケットを開けた。中には今は亡きビルマーダの皇帝夫妻の小さな肖像画が入っていた。黒髪の皇帝の隣に居るのは、エンディラの母ソルラフィアではなく、アスベルと双子の母のシンディアだ。シェスラとセシルと同じ金髪に青い目の綺麗な人。エンディラも母と慕った皇后だった。

エンディラはその絵を外した。そこに、毒があるはずだった。

しかし、そこにはなにもなかった。

「シェスラ」

淡々とした声でエンディラはシェスラの名を呼んだ。シェスラは何も言わなかった。

「お前、どこで毒を使った」

この時、すでに皆が思っていた。エンディラに毒をもったのはシェスラ。

実の、妹――――――

レトナヴァルは信じられなかった。あの優しく笑う少女が犯人？

「あ～あ、ばれちゃった」

しんとするなかで、シェスラの明るい声は少し異常に感じた。

「そうよ、わたくしがエンディお姉さまに毒をもったの」

「なんでだ、シェスラ……」
エンディラではなく、アスベルが悲痛な声で言った。そんなアスベルにシェスラは笑顔で言った。
「だって、恋敵なのですもの」
シェスラは堂々と宣言すると、レトナヴァルを見た。その蒼い目の中で燃える意思に、気付かずにはいられなかった。
「レト様」
蜂蜜のようにとろりと甘い声で、シェスラは言った。
「お慕いしておりました。初めてあった時から、ずっと」

第２３章

シェスラの告白の後、しばらく誰も口を開けなかった。
特にステラはぽかんと口を開けている。どう見てもその口から魂魄がとんでいる。つまり、本心状態だ。
唯一表情が変わらなかったエンディラは、しかし紫水晶の如く輝く瞳は動揺でか揺れていた。
しかしすぐにその揺らぎは止まり、彼女の目はレトナヴァルに移る。レトナヴァルはステラよりも放心状態だった。何か言おうと口がもごもご動いているが、何も言えていない。
「レトナヴァル殿」
エンディラが淡々とした声で、レトナヴァルを呼ぶ。レトナヴァルはなんとか我に返り、エンディラを見る。紫水晶のような目からは、彼女がどう思っているのか理解が出来なかった。
「……なんだ」
「私ではなく、シェスラでは駄目か」
「何が？」
話が読めずに尋ねたレトナヴァルは、次にエンディラの口から出た言葉にぎょっとなった。
「あなたの婚約者だ。別に私にこだわることはないだろう。シェスラはビルマーダの皇女だ。それに貴殿の妻となりたいというなら、私より適任かと思うのだが」
一同に走った衝撃は、シェスラの告白に比べれば軽いものだ。しかしレトナヴァルはまるで鈍器で頭を殴られたような衝撃を感じた。
私より適任かと思うのだが。
エンディラのそのセリフだけが、レトナヴァルの頭をぐるぐると廻る。

「あなたは――――――それでいいのか？　つまり、俺の婚約者でなくなるということは、その……」
「死ぬということか？　構わない。もともと私は死ぬことを覚悟してきた。アスベル、シェスラ、セシル。私はこの三人がこの国で幸せに暮らせるのを何より望んでいる。他は何も望まない」
その通りだということは、レトナヴァルは知っていた。最初に国王に謁見した時、エンディラが唯一言った望み。それは今言ったことだ。

『私が願うのは一つです。アスベル、シェスラ、セシル。この三人が幸せに暮らしていけること。出来るのなら望む相手と婚姻出来ること。それだけです』

王はそれを飲んだ。つまりは、エンディラのその願いは叶えられるということ。しかし――――――
国王だって予想していなかったろう。まさかその条件を飲むかわりという婚姻が、無効になるかもしれないなんて……
レトナヴァルは嫌だと言いたかった。しかしエンディラの紫水晶の目を見れば、その気持ちは萎えた。というより言えなかった。彼女の目は、いつものように静かな湖面のようではなく、珍しく感情があらわになった。それは、死への渇望だろうか？
（死にたいのか、それほどに……）
レトナヴァルの頭に浮かぶのは、血まみれでしかし必死でこちらに剣を向ける優男の姿――――――。
レトナヴァルは何も言えなかった。他には誰も何も言えなかった。シェスラでさえ、無邪気に喜んでいいのか分かりかねているようだった。
その中で、口を開いた人物がいた。
「エンディラ様」
ステラだった。

「なんだ」
「それは無理ですわ」
「なんだと」
鋭い目つきで、エンディラはステラを見た。しんとする部屋の中で、誰かが息をのむ音が響いた。そっちを見れば、ルドウィックが苦い顔でステラを見ていた。
「どういう意味だ、言えステラ」
「だって、シェスラ様とセシル様は、前皇帝陛下の御子ではありませんもの」

第２４章

「嘘よっ」

ステラの告白により、流れた重い沈黙を破ったのは当事者であるシェスラだ。彼女は『帝国の華』と呼ばれる美貌を怒りに震わせていた。

「どんな証拠があって、わたくしが――――――――わたくしとセシルが、お父さまの子ではないと言うの！？お姉さま……エンディお姉さま、ベルお兄さま。こんな、こんな蛮族の言うことなど、信じないでしょう！　ねえ、ねえそうでしょ……。レト様、レトナヴァル様……」

シェスラがすがるようにエンディラを、アスベルを、レトナヴァルを見た。

エンディラは鋭くステラを見ていた。

「なぜ、お前がそんなことを言える？」

「だって、私、ティルレシア様に望まれてビルマーダに来ましたが、あの方の死後、私はヴァルドシュタールの『剣』になるようにティルレシア様から命じられていましたから」

レトナヴァルはステラの告白に驚いた。ルドウィックから皇女達の近くに『剣』はいると言われていたが、レトナヴァルにはその正体は告げられていなかった。故に、まさかこんな近くに昔から配置されていたとは知らなかった。しかも、女傑ティルレシアの采配だとは……。

ステラは今の主であるエンディラを見つめて、さらに話し始めた。

「ティルレシア様は、ソルラフィア様がなによりグローディル様にふさわしいと考えていましたから、エンディラ様出産後すぐソルラフィア様が亡くなったあと、シンディア様が皇后の座におさまった

ことはあまり気にいることではなかったのです。しかしそれでもエンディラ様に母と呼べる存在が必要であるということ、もともとクローディル様がソルラフィア様という親に決められた婚約者に対し、好意を持てず愛人を作り、エンディラ様が生まれソルラフィア様が亡くなった後すぐにシンディア様のご懐妊があったということで、ティルレシア様は渋々受け入れたのです。そしてアスベル様が生まれた時は、ティルレシア様もとても喜びました。そして御二人の結婚を今度こそ心から祝福したのです。

しかし、その後です。エンディラ様が三歳の時に、シンディア様はまた子を授かりました。セシル様とシェスラ様です。しかしティルレシア様はいぶかしみました。懐妊が分かる半年前から、クローディル様は城を留守にしていたのです。時折帰って来ていましたが、ほとんど城の外でした。

そうしてティルレシア様は、エンディラ様の侍女も兼ねている私にシンディア様の最近の様子を調べるよう命じました。エンディラ様の付き添いで、シンディア様の住む宮に行くことが多かった私が適任なのだと思いました。

私は調べました。そしてある事実が浮上しました。ここ半年、金髪の美目麗しい男が出入りしているということを。それがケイス・ヴォルタール・ロドフォルスト。ガルフォード家の当主の弟で、ロドフォルスト家の婿でした」

レトナヴァルはその名にピンときた。確か、紫紅戦争の引き金を引いた馬鹿な貴族だ。しかしそれ以上にレトナヴァルは『ガルフォード』の名に驚いた。確か――――――

エンディラはそっと目を閉じた。彼女はケイスという男を知っていた。そして、その男が……

「その男は、エンディラ様のご婚約者であられたデュラス・アレイス・ガルフォード様の叔父にあたる方です」

アスベルが不安そうにエンディラを見ていた。エンディラは目を開けると、双子をうかがった。どちらも顔が真っ青だ。

「私が調べた結果、セシル様とシェスラ様は間違いなくこの男の子にあたります。いわゆる、シンディア様の『過ちの子』ということになります」
「嘘よ……」
シェスラが崩れ落ちた。今まで自分というものが持っていたものが、全てなくなってしまった。セシルは椅子に座ったまま硬直していた。彼もシェスラと同じだった。
「嘘ではありません。お二人に皇帝陛下の面影が一切見られないことから、間違いなくセシル様とシェスラ様はケイスという男の子です」
ステラの言葉で、エンディラもアスベルも思った。
全てが、崩壊してしまったのだと……

第２４章（後書き）

クローディルとは先代皇帝陛下の名前です。エンディラ達の父です。

第２５章

「ルドウィック」
レトナヴァルは放心状態の皇室四人から目を離し、自分の忠実なルドウィックを静かに呼んだ。
「は」
「ビルマーダ帝国皇太子エンディラ・ソルラフィア・ビルマーダ毒殺未遂犯人として、シェスラ・シンディア・ビルマーダを拘束しろ」
彼女が不義の子と知られたじてんで、彼女の性がビルマーダでいいのかは分からないが、それでも他に呼びようがないのでレトナヴァルはそう告げた。ルドウィックはステラにも目配せし、彼らはへたり込むシェスラを立たせ、簡単に拘束した。シェスラは抵抗せずに、されるがままだった。エンディラもアスベルも、何も言わなかった。
「ま、待って下さい！！」
ただ、セシルだけが声を上げた。シェスラと同じ顔で、唯一シェスラに駆け寄ろうとした。が、ステラに技をかけられあっという間に宙を舞い、床に叩きつけられた。
「ハルステラ？」
ルドウィックが戸惑ったようにステラの名を呼ぶ。ステラは床に叩きつけたセシルも、シェスラと同じように拘束していたのだ。
「ルドウィック、首謀者はシェスラだけど、実行犯は違うわ」
「は？　……なんだと？」
「私も調べていたから。毒が仕込まれた焼き菓子に毒を仕込んだのはセシルなの」
目撃情報を仕入れたから、確実。
ステラの言葉に、セシルはうつむいた。が、すぐに顔を上げて、

真っ青な瞳に覚悟を秘めて言った。
「そうだよ。僕が毒を仕込んだんだ！　シェスラが可哀そうだったから！」
「違う！」
シェスラが初めて抵抗した。拘束された身体を必死でよじるが、ひ弱な少女が訓練された成人の男の手から脱け出すことなど出来るわけなかった。だからシェスラは必死でわめいた。
「違う！　わたくしがセシルを脅したの！！　双子でしょって！」
「違う！　毒を入れたのは僕の意思だ！！」
それぞれ相手をかばうかのような発言に、レトナヴァルは困った。しかし首謀者と実行犯となると――――――
「ルドウィック」
「は」
「とりあえず、二人とも北の塔へ幽閉してくれ」
「分かりました」
忠実なレトナヴァルは、素早く双子を拘束した。
「待て」
そのまま部屋を出ていこうとしたルドウィックに、静止の声がかかる。エンディラだった。
「エンディお姉さま、わたくし、後悔していませんわ」
しかし何か言おうとしたエンディラよりさきに、シェスラが嗤いながら言った。初めてみたシェスラの顔だった。
「そうか。すまない」
あまり感情のこもってはいない声だったが、シェスラはどうしようもなく虚しくなった。しかしそれでも後悔はしなかった。
「軽々しく謝罪なんかするんじゃないですわ。だからわたくしは、あなたが大嫌いなんです」
最後はくるりとエンディラに背を向けて、吐き捨てるように言った。だから、セシル以外誰も気が付かなかった。シェスラの目が、潤んでいることに。だからセシルは素直じゃないなあと思った。

しかし、それはセシルの勘違いだった。
（いつか、必ず復讐してやりますわ。あなたが幸せになったとき、必ず、不幸のどん底に突き落として差し上げますわ。レトナヴァル様は、絶対に諦めませんの）
そんな復讐の誓いに、セシルは気が付くことはなかった。

エンディラの用事が終わったので、レトナヴァルはエンディラを庭の池を見に散歩に誘った。
池には蓮の花が咲き乱れていて、とても綺麗だったが、しかしエンディラもレトナヴァルも無言だった。
（何か言え、俺！）
レトナヴァルは無言に堪えかね、何か話題を探した。しかし、何も浮かばなかった。
最初から本題を言っちゃう？　いやいや、突然すぎる。
一人悶々とするレトナヴァルに、エンディラが声をかけた。
「レトナヴァル殿」
「……なんだ？」
「今日は、助かった」
「気にすんな」
そのまま、レトナヴァルは言った。
「デュラス・アレイス・ガルフォード」
エンディラがはっとしたようにレトナヴァルを見た。
「婚約者だったんだろ」
「ああ。なぜ……？」
「言っておくことがある。戦争で、俺は……。いや」
レトナヴァルは迷いを振り切って、言った。
「俺が、戦場でその男を殺した」

第２６章

エンディラはその場に立ち尽くした。
頭が、現実を理解するのを拒否する。だからレトナヴァルの言った言葉の意味が分からず、エンディラは尋ねた。
「なんだと？」
「俺はお前に責められても仕方がない。でも、事実なんだ。デュラスは俺が殺した」
レトナヴァルは叱声を覚悟した。憎まれてもしょうがないのだ。
しかし、いくら待っても叱声は飛んで来なかった。あれ、と思ってエンディラを見て、レトナヴァルは息を飲んだ。
今にも泣き出しそうなエンディラが、レトナヴァルをじっと見ていた。潤んだ紫水晶の瞳が、いつになく輝いていた。その瞳から涙が零れるのを、エンディラは必死でこらえているようだった。
「私はっ」
しばらくして、エンディラが吐き出すように言った。
「私は、皇女だ。そして、皇太子だ。一人のことだけを優先し、国をおろそかには出来ない……。私達は負けた。それが真実だ。敗戦国側が何と言っても何の意味もない。だが、個人としては辛い。貴殿のことは、そんな嫌いでもなかったから。でも、戦場で殺された彼は――――――デュラスを、私はずっと、ずっと愛していたから……」
初めてだった。感情を露わにしたエンディラを見るのは。それは、こんなにも辛そうで哀しそうでも、レトナヴァルは彼女を美しいと思ってしまった。感情のないエンディラより、数倍も。
「すまない……」
レトナヴァルは頭を下げる。許されようとは思わない。しかし、それでもやらずにはいられなかった。
「本当に、すま」

「王になる者が、軽々しく頭を下げるな」
叱声が飛んだ。頭を上げれば、エンディラが厳しい顔でレトナヴァルを見ていた。
「上に立つ者は弱みを見せてはならない。そう教わらなかったのか？」
「いや」
「口応えはいらない。私が言うのは当然のことだからだ」
まだ瞳に涙が光っている。強気に振舞ってはいるが、やはり辛いのだろう。
レトナヴァルはさっき吐露したエンディラの言葉を思い出す。
『貴殿のことは、そんな嫌いではなかったから』
その言葉に、ちょっと気分が明るくなってしまう。状況が状況でなければ、ニヤついていたかもしれない。それほどに、その言葉は嬉しかった。
レトナヴァルは浮かれる自分にハッとして、渇を入れた。こんなこと思っているときではないのだ。
「なあ」
「なんだ？」
「デュラスのこと、追って死にたいのか？」
直球でレトナヴァルは一番気になっていたことを聞いた。答えは予想出来ている。それでも、聞かずにはいられなかった。
エンディラは、少しだけ紫水晶の瞳を見開いて、しかしすぐに答えた。
「彼は、私が――――――皇太子としてではない一人の人間として、エンディラ・ソルラフィア・ビルマーダという大層な名前を背負った者ではない人間としての生きる意味だった。そんな彼を失った今、私に生きる意味はない」
つまりは……

「死にたい、そういうことだ」
レトナヴァルは目の前が真っ白になる気がした。理性が本能を押さえるのが感じられるが、レトナヴァルはその理性を振り切った。そして、気が付いたらエンディラを抱きしめていた。
「生きる意味？　そんなものまた作ればいいだろ！！」
吠えるように叫んだとき、レトナヴァルは自分がなにをしているのか実感して青くなった。が、なんかもったいない気がしたので、離さなかった。
「また、作る？」
戸惑いながらエンディラはレトナヴァルの腕の中で、半分硬直していた。デュラスは最後までエンディラの手しか握らなかったので、誰かに抱きしめられるなんてことは初めてだったから戸惑っていたのだ。
「簡単に出来ると思うか？」
皮肉気にエンディラは嗤った。
三年前、エンディラはデュラスを失ってから、まるで抜け殻のようにして生きていきた。その間、アスベルもセシルもシェスラも、エンディラの生きる意味にはならなかった。
また作るなんて無理だと思っていた。
「俺が、なってやる」
レトナヴァルの言葉に、エンディラは目を見開いた。
「俺じゃ駄目か？」

第27章

「貴殿が？」
エンディラは戸惑っていた。なぜの男がこんなことを言うのかさっぱりだったし、正直抱きしめられているのにも羞恥が湧いてきたから離して欲しかった。
「ああ、なってやる」
「……離してくれないか」
「えー」
レトナヴァルはちょっと嫌だった。しかし自分の顔を見上げたエンディラに睨まれて、渋々離した。本当に渋々。
「ちぇ」
レトナヴァルは小声で悪態をついた。もの凄く小さな声だったので、聞こえてないかと思っていたのに、エンディラはきっと睨んできた。しっかりと聞こえていたみたいだった。
「貴殿にそこまでする理由はないだろう」
「はあっ！？」
思わず声を張り上げたレトナヴァルを、エンディラは少し気をされたように見た。なんというか、さっぱり分からない男だ。デュラスもそうだったが、こいつも全く読めない。
「分かんないのか？」
レトナヴァルは内心呻きながら言った。さっき抱きしめたり、生きる意味になるとか言った時にもう自分の気持ちはバレバレだと思っていたのに。まさか、まさか分かっていないとは思わなかった。もの凄く困った。
「何がだ」
全く分からないので、エンディラは尋ねた。
その反応にさらに唖然として、レトナヴァルは言ってしまおうか迷った。迷うところが姉や妹にへたれと言われる原因なのかもしれ

ない。だったら、言ってしまおうか。どうせもう色々ダダ漏れの状況だし……。
よし、とレトナヴァルは覚悟を決めた。
すうっと息を吸い込んで、レトナヴァルはエンディラの紫水晶の瞳をしっかり見つめて言い放った。
「あんたを、愛してるから」
そう言った時エンディラの顔が驚愕に彩られたので、レトナヴァルは小さな声で続けた。
「……と思う」
「錯覚だ」
エンディラは鋭く言った。あり得ないと思っていた。そう決めつけていた。
レトナヴァルは短くそう言われ、地味に落ち込んだ。普通、こういうときははいかいいえだけ聞くものだと思っていたのに、返って来た返事は短く「錯覚だ」――――――
「錯覚じゃない」
「根拠は」
「……」
根拠なんて分かるわけなかった。思わず黙ったレトナヴァルにたたみかけるように、エンディラは続ける。
「出てこないだろう。なら錯覚だ。間違いない」
「だから違う！」
「何が違う。私が告白された経験が皆無だと思うか？　誰でもビルマーダ帝国の次期皇帝の旦那という肩書が欲しいからな。私に婚約者が出来てからも、しつこい貴族は私に取り入ろうと頑張っているのを見てきた。「あなたを愛している」など、飽きるほど聞いた。中には七歳の幼女にそう言った馬鹿もいた。だから私は今の貴殿のように言った。「錯覚だ」と。当然皆貴殿のように言う。だから聞

く、「根拠は？」と。私ではなく私の肩書が欲しいものは必ず口ごもる。
まあ、貴殿はそんな肩書などいらないと思うし、すでにそれは私の手元にない。それに貴殿と私は婚約者だ。そんなことを言う必要もないだろう」
冷静に言われたレトナヴァルは、何も言えなかった。レトナヴァルだって同じようなことはあった。たいていの貴族令嬢は、レトナヴァルに気に入られたがった。そうすれば、未来の王妃の座を手に入れることが出来るから。
それでもレトナヴァルがはっきりと公の場で、なびいてくる貴族令嬢なんて嫁に取るかと宣言したので納まった。それに父もやんわりと野望を持つ貴族に注意したと言っていた。
それに比べれば、エンディラはかなり凄いと思った。婚約者がいても納まらなかったのだ。
だからって、レトナヴァルの告白を頭から否定される気はないのだ。
「俺は、ただ……」
「ただ？」
だんだんと無表情から遠ざかって行くエンディラは、今度は鼻で笑った。
「くだらない」
「少しは話を聞けよっ」
レトナヴァルは声を荒げた。だんだんと腹が立ってきた。
「否定しすぎだ。少しは人の真摯な気持ちを聞けっ！」
「聞いてどうなる？」
「俺がすっきりする。少しは」
エンディラは目を軽く見開いて、そしてくすっと笑った。
あれ？
レトナヴァルは驚いた。笑った。この鉄面皮が、万年無表情女が。
（あ……）

笑ったら、可愛いじゃないか。
「……五月蠅い」
エンディラがぷいっとそっぽを向いた。どうやら、口に出していたらしい。
「お前、もっと表情出してけよ」
「……なんで」
「可愛いから」
「黙れ」
珍しく真っ赤になって、エンディラが言った。そのあと、小さな声で続けた。
「悪かった。その」
「気にすんな。そのうち、分かってくれればいいから」
「ああ」
レトナヴァルはエンディラの髪にそっと触れた。黒い真っすぐな髪は、触り心地がとてもよかった。

第２８章（前書き）

これから新章（？）ってかんじになります。
新キャラも登場です。

第２８章

シェスラ、セシル拘束から一週間――――――

レトナヴァルはアスベルとともに中庭を散歩していた。アスベルがしつこく、色々聞いてきたので、気が付けばレトナヴァルは以前の午後にエンディラとかわした会話を含め全てをアスベルに言っていた。

「へえ～」

意味深に笑うアスベルに、レトナヴァルは仕返しするつもりで聞いた。

「で、お前はどうなんだよ」

「俺？」

「ローズマリー嬢だっけ？」

優しくて大人しそうな少女を思い出しながら、アスベルに告げれば、アスベルは凄い勢いでぷいっとそっぽを向いた。

「べべ、別に」

「へえ」

同じく意味深に笑ったレトナヴァルに、アスベルが苦い顔をしながら言った。

「からかって悪かった」

「分かればいいさ」

肩をすくめてそう言ったレトナヴァルに、アスベルが言う。

「そういえば、エンディがまた少しだけど笑ったりするようになったんだ。表情が戻ったって感じなんだ」

「そうか」

「レトのおかげだろ。ありがとう」

レトナヴァルは何も言わなかった。アスベルもそれに対してはもう何も言わず、さらに話を続けた。

「今日はさ、ローズがエンディのとこでお茶会するんだと。フィラ

やもう一人いるらしいけど、レトも行く？」
アスベルの誘いに、レトナヴァルは笑顔で言った。
「ああ」

そのお茶会には突然参加のレトナヴァルを加え、六人で行われることになった。新メンバーであるレルノーラ・アリアナ・ロイデンというエンディラと同い年の伯爵夫人を加えたお茶会は、表向きはとても微笑ましく見えた。
が、内容はセネフィラのアスベルとローズマリーの冷やかしだ。あとの三人は徹底的に傍観者となっている。
「アスベルって、エンディお義姉様に全然似ていませんのね」
「そうか？」
「ええ。もの凄く人のことからかうの好きで、とーっても性格悪いですわ。ローズマリー、今からでも遅くありませんわ。婚約のこと考え直しませんの？」
「セネフィラ！」
「残念ですがフィラ様、わたしはもうアスベル様以外にお婿に来ていただこうとは思っていませんの」
「ひゅ～ひゅ～」
「うるせえ！」
いつの間にか、ローズマリーの父とも謁見していたらしい。エンディラがそのことを知ったのは、すでに親公認の仲で婚約間際の昨日の夜だった。
「ローズマリー」
今まで黙って紅茶を飲んでいたエンディラは、優雅に紅茶を置くとローズマリーを見る。前とは違い、口元には軽くだが笑みが浮かべられている。
「はい」

「こんなやつだが、アスベルをよろしく頼む」
「はい」
笑顔で返したローズマリーに、アスベルはそっと目をそらした。
「初々しくていいですねえ」
そんななかではあ～、とため息をつきながら言ったのはレルノーラだ。彼女はアスベルとローズマリーを少し羨ましそうに見ている。
「うちなんて完全に政略ですから、旦那なんてもうあっちこっちに愛人作りまくってますから。こういうのって、すっごい憧れますわ」
笑顔だが、以外に口からでた発言は凄い。エンディラは微妙に顔をひきつらせながら、うなずいた。もしかしたら、自分もこうなっていたかもしれないのだ。そう思うと、何も言えなかった。
微妙に空気が悪くなった時だった。ステラが突然飛び込んできた。
「エンディラ様！」
ヴァルドシュタールの『剣』と発覚した彼女だが、エンディラは別に気にしないってことで今まで通り侍女としてエンディラに仕えることになったのだ。
「どうした」
「大変です！」
一同が一斉にステラを見た。その中で、ステラはあまり嬉しくなさそうな顔で――――――ぶっちゃけ、心底嫌そうな顔で言った。
「あいつです！　あのウザ……アルザーグ・ロード・ブレイディル！……侯爵です！　奴がきました！
この国に！　面会を求めています！！」
その名に首をかしげたのは、エンディラを除いた全員だ。アスベルはどっかで聞いたことあるような、ないような～と考え、やっぱり分からなかった。
「誰だ？」
レトナヴァルがエンディラに尋ねると、エンディラの口から小さ

く舌打ちが聞こえたような気がした。
（え？）
「帝国の隣国、フレイヤ王国の貴族だ」
エンディラはそう言いながら、内心心から呻いていた。
よりにもよって、もう二度と会いたくないやつだったのに――――

「あー、思い出した！」
アスベルが晴れやかな顔で、言った。
「前にエンディに求婚してきたやつだ！」

第２８章（後書き）

アスベルの話も、いずれ……とか思ってます。
ちょっとこれから修羅場っぽくしたいなって思ったりしてます。
あと、エンディラ性格変わりすぎですね……。

第２９章

エンディラは国の賓客ということなので、仕方なくレトナヴァルと会いに行くことになった。本当に嫌々。

わざわざ親しい人達との午後の一時を無駄にしてまで、エンディラはあいつに会いたくなかったのだ。でも、レトナヴァルが付いて来てくれるというので、渋々うなずいたのだ。一応、相手は国賓だし自分の立場は王太子妃候補というところだ。婚約者として、彼の顔に泥を塗るわけにわいかないのである。

「会いたくない」

心からそう思ってエンディラは言う。すると並んで歩いていたレトナヴァルが苦笑した。

「まあまあ」

以前より雰囲気が随分柔らかくなったエンディラを見て、後ろからエンディラと同じくアルザーグと会いたくないステラはしかしふっと微笑んだ。

あいかわらず黒い服しか纏わないエンディラだが、まるでお揃いの如く黒い服を着ているレトナヴァルと歩くとなかなか様になっているとステラは思う。ヴァルドシュタールの『剣』である立場だが、エンディラもレトナヴァルも変わらずエンディラに仕えることを了承してくれたので、ステラにとってはこの二人の存在が大きくなっている。エンディラは前にも増して、レトナヴァルは株が上昇して。

その二人が、これからあいつに会うのかと思うとステラは嫌な気分になった。あいつの姿を見たら、今度は吐き気がプラスされるのだろう。

「なあ、そのブレイディル卿はどんな奴なんだ？」

「言いたくないし思い出したくもない。もし聞きたいなら、後でアスベルに詳しく聞いてくれ。私もステラもとてもじゃないが思い出したくもない。ああおぞましい」

エンディラが心底嫌悪感を持っているのが分かった。言葉に嫌！っていうのがにじみ出ている。
「大丈夫ですよ」
ステラが苦笑しているレトナヴァルに言う。
「見れば、知りたくなくなりますから」
それはどういう意味だ？
しかしそう聞く前に、一向はある部屋の前に通された。お忍びで来ているらしいので、国王と一部の人間にしか客のことは知らせていないとステラから聞いた。その一部の人間に、レトナヴァルは自分が入っていなかったことに少しショックだった。
「失礼します」
扉の前に立つ護衛がエンディラの顔を見て素直に通してくれたので、三人はそれぞれの反応で入っていった。一人は恐る恐る、一人は今すぐ帰りたいと呟き、一人は同感ですと言って。

「姫君っ！」

部屋の中にいたのは二人だ。男女それぞれ一人ずつ。そのうちの男の方が、エンディラを見て顔をぱっと輝かせた。しかも近付いてきた。エンディラの嫌そうな表情と、部屋には男女一人ずつしかいなかったので、それがアルザーグ・ロード・ブレイディル侯爵なのだとレトナヴァルは判断する。
「お会いたかったです。ご無事ですか？」
「私は二度と会いたくなかった。あと私の半径二メートル以内に近付くな。貴様なんかと同じ空気を吸っているのかと思うと虫唾が走る」
以前の無表情に戻ったエンディラが、レトナヴァルが一度も見たことが無い冷たい目でアルザーグを見下ろしていた。それを見て、レトナヴァルは自分が嫌われていなかったのだと自覚できた。
「お元気そうでなによりです、姫君」

「貴様に会って元気などしぼんだわ」
「その蔑むような紫水晶の瞳に僕が映っているのかと思うと、とても嬉しいです」
うっとりした様子でエンディラを見るアルザーグに、レトナヴァルはこいつ大丈夫か？　と思った。今の発言からして、普通の人じゃない気がするのだ。あと、かなり気に食わない。
「アルザーグお兄さま。挨拶がまだですわよ」
部屋にいた女の方が、痺れを切らしたのか口を開いた。アルザーグを女にしたようなかんじの女だ。でも、美人だと思った。エンディラには劣るが。
アルザーグは妹（多分）の言葉に我に返ったのか、レトナヴァルに目を向けた。レトナヴァルは先に名乗った。それからアルザーグが言った。
「いやあ、全く気が付きませんでした。影が薄いんですね。さすが蛮族の王太子殿下。あと、僕はご存じかもしれませんが、アルザーグ・ロード・ブレイディルです。こっちは従妹のリリエット・クラリス・ブレイディルです。あなたの花嫁になる女性ですよ、殿下」
「突っ込みどころがありすぎるんだが、どこから尋ねたらいいか分からねえ」
思わず呟いてしまったレトナヴァルの心境を察知したのか、エンディラが彼の肩をたたく。その様子を見たアルザーグが、すっと目を細めた。
「そういえば、どういう用件でいらっしゃったのですか、殿下」
「婚約者の付き添いだ。特に用件はない。邪魔したか？」
「婚約者？　誰が誰の？」
アルザーグが聞く。レトナヴァルは彼の声に少し陰険が混じっているの気が付きながら言った。
「俺がエンディラのだ」

「なんだって！？　姫君、まことですか！？」
「本当だ」
エンディラがあっさりと了承したので、レトナヴァルはほっとした。しかしアルザーグの表情を見て安堵は消えた。彼の顔には、なんらかの決意が見えた。
「……そうですか。しかし僕は気にしません。幸い、婚約だけですからね」
そう独り言のように呟くと、アルザーグはエンディラの足元に跪いて、驚くエンディラの手を取った。
「汚らわしいから離せ」
冷たく言い放ち、自ら手を振りほどこうとするエンディラに、アルザーグが言った。
「姫君、僕はあなたを愛しています。結婚してください」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2698t/

?ＳＰＡＤＥ?

2011年8月29日03時37分発行